年の一月中旬實業學務局長に辭職を申出でたのであります。最初一ヶ月位は局長も考慮致して居りましたが、諸種の狀勢を考へて遂に決心せられまして、極祕裡に進行せられて誠に好都合に新舊校長の交迭まで完了致しました。何等波動を及ぼさずして都合よく行きましたことは私自身にも後任校長にも又學校の御都合も至極上々でありまして、私と致しましては此程の幸福はないのであります。

局部的に見れば爲さねばならぬことは色々殘つて居る樣でありますが、學校の大所高所より見て重要なりと信ずる點が誠に好都合に運んだことを考へるとき今も愉快を禁じ得ないのであります。

退官理由は以上の通りでありますが、何卒將來も我神戸高等商船學校のために十二分の御援助を頂きまして、邦家海運のため大なる貢献を致す樣宣しく御願申上げます。今夕の御厚意に對し重ねて深く感謝の意を表すると共に茲に杯を擧げて同校の隆昌と卒業生御一同の御健康及將來の御發展を祈ります。

放送原稿其の他

海國民の使命

（昭和三年七月大阪中央放送局より全國中繼にて放送したるものなり）

私は只今御紹介のありました通り「海國民の使命」と言ふ事につきまして、暫く皆様の御清聽を煩はしたいと思ひます。

今や我大日本帝國は上、歴代天皇の御稜威と、下國民の營々努力に由りまして、僅か過去數十年の間に世界三大强國の一つ即ち彼の英國、米國、と並び稱せられる國として、國際的に世界に認められて參つた事は誠に皆様と共に大なる慶とする次第であります。然しながら徒に其の美名に醉はされて將來に對する覺悟を忘れて居てはならないと思ふのであります。

或外國人が嘗て我日本の發展振りを評して曰く「日本は世界的に目醒めて以來僅々五十年の間に能く歐米文化の八、九分通りを追隨し得た、然し殘る一、二分の爲めには日本は恐らく今後幾多の年數を必要とするであらう、何んとなれば總ての事柄に於て基礎的部分即ち何事に於ても土臺となるべき事柄が閑却されているから」と云つたそうでありますが、私共國民は深く內に省みて之れを他山の石として將來に對する計を運らし、以て國家百年の大計を樹てねばならないと思ふのであります。

茲に於て私は海事教育者としての立場から、如何にしたならは我國運を之れ以上更に安固ならしめ更に隆昌なら

しめ得るかと言ふことにつきましてお話を進めて行きたいと存じます。

夫れには最初に我國の經濟的現狀が如何なる有樣であるかと云ふことを承知して置かねばなりません。只今から夫れに就て二、三の事實を考へて見ましよう。

先づ第一に、領土卽ち日本の國の廣さのことであります。調べた所によりますると、夫れは二十四萬方哩と稱されてお互の耳にはかなり大きく響きますが、之れを世界的に他の大きな國に比較するならば實に言ひ知れぬ淋しさを感ずる次第であります。卽ち英國の五十分の一、米國の十二分の一、支那の十八分の一、しかないのであります。

第二には、人口の問題であります。國家として忠良にして勤勉な人の多い事は誠に悅ぶべき事ではありますが、我日本國の人口稠密度は實に世界第三位と稱されて居ります。のみならず人口の增殖の度合が甚だ多く、しかも海外に殖民地を持たぬ爲め愈々益々人口の稠密度は增加しつゝあるのであります、從つて年と共に食糧の不足を來たしつゝあるのも皆樣御承知の通りであります。

次に第三に數ふべき事は、我國の天然資源卽ち國內の物產、例へば鐵、石炭、石油、木材其の他大工業の原料となるべきもの等でありますが、之れ等の產出高が極めて貧弱で、實は國內の需用すら永く滿たし得ない狀況にあると言ふ事であります。夫等工業に必要な原料のみならず、現に私共の常食である處の米や麥さては衣物、布團等の材料である所の木綿乃至は皆樣が每日なくてはかなわぬ洋服、帽子、しやつ等の材料である羊毛等も皆海外から輸入して漸く間に合はして居る狀況にあるのであります。之れが爲には年々歲々、多額の輸入超過を來たして居

るのでありまして、自然我國の正貨が海外に流出することゝなるのであります。彼の歐州大戰當時卽ち大正四年乃至七年に亘る數ヶ年は我國も輸出超過國でありましたが、爾來相も變らず每年輸入超過を續けつゝあるのであります。此の事實は日本の財產卽ち金貨が年々歲々に減少しつゝあることを雄辯に物語つて居る譯であります。

以上申上げた樣なわけで、我國の經濟狀態の一斑を見ます時、其所に甚だ憂慮すべき材料が多いのであります。と言つて直ちに國土の擴張は望み得べくもありませず、又直ちに人口の殖へて行くのを止めてしまうことも望ましくありません。のみならず先天的に少ない天產を增加することなど元より爲し得ないのであります。

然らは如何にして能く斯かる狀況にある我日本帝國をして永く世界の三大强國の一つとしての實力を保有せしめ更に進んでは如何にして國力を一層充實せしめ得るやと言ふ事こそ、吾等國民全體に振りかゝつてくる最も重大な問題であろうと思ふのであります。

私の考へます所では、世界に冠絕せる我金甌無缺の國體を絕對尊うとしとする信念を中心として國民は協力一致內殖產興業を隆盛ならしめ、外貿易を盛大ならしめて海外よりの金貨流入を企て、以て我國將來の安定を圖るべきであると思ふのであります。

抑も地球の四分の三は海洋の占むる所でありまして、現に世界總貿易額の約八割は船舶の輸送に係はると言はれて居ります。殊に四面海を以て廻ぐらされて居る我日本帝國の如きは對外貿易の全部を擧げて海運に俟つのであります。

由來海運業は之を經營者の立場から見るならば一つの個人的營利事業に違ひありませんが、實は之れが盛衰は直ちに國運の消長にも係はる重要任務を帶びて居るのであります。卽ち國民生活の必需品の輸入、製產品の海外輸出さては通信の運輸及び東西文化の輸出入機關として重要なる役目を遂行し、他面國旗を飜がへして國威の發揚國力の發展を促し、更に陸海軍の後援としては直ちに國防機關となり、國家存立の安危にさへ係はる所の重要任務を持て居るのであります。

今假りに我國の如き島帝國にして海運が全く杜絕した時を想像するならば、如何ばかり暗黑な悲慘な世態が現出することでありましようか。其の時こそ實に國民生活に重大な恐威を持ち來たすのであります。卽ち私共日常の糧である所の米麥は元より綿毛布の類まで直ちに不足を生ずるに至るでありましよう。又萬一鐵の輸入が杜絕されたならば造船造機等の各種大工業は中止するの止むなきに立ち到りまして、現に陸上に於ける賃金生活者の大部分の運命は如何になり行く事でありましよう。のみならず海外との通信機關を失ひ、尙ほ其の上に文化進步上缺く可からざる書物等の來着を阻止するに立ち到りましよう。殊に國家存立上重大な使命を持つ陸海軍の後援としての商船の力が無くなつた時を思ふならば、實に背に冷汗何斗なるやを知らぬのであります。

以上申上げました樣に我國の現狀は領土狹まく、然も物資に乏しく又一方人口夥多に苦しむと言ふ現況であります。之れを要するに我國は永久に輸入超過國たるの運命にあるのであります。故に何んとかして其の輸入超過額を決濟すべき道を考へねばなりません。幸にも海洋は橫行濶步するに自由であり、船舶は實に領土の延長でありま

す、言葉を換へて言ふならば狹い領土も船舶に由つて擴大し得ると思ふのであります。

愈々世の識者が思ひを此所に致し積極的に我海外貿易を盛んならしめ、一面我國を一大工場として安價なる原料を廣く海外に仰ぎ、之に加工して再び海外市場に輸出して以て其の間の利益を得ると同時に大に海國民魂を養ひ、やがては更に大商船隊を作つて外國港灣間の輸送をも開始して以て夫れに依る運賃收入の增加を計り、而して海外正貨の國內流入を圖りたいものと思ふのであります。

實に之れこそ四面環海の日東『海國民の使命』であると思ふのであります。

現に大英國本土が我國よりも遙かに大なる輸入超過國でありながら、然かも國の富が年々增殖して行くのは、之れ全く英國が世界第一の海軍を持て居て世界の海を睥睨する一方名實共に世界第一の商船隊を有して居るが爲めであります。卽ち海運に依る運賃收入が莫大なる爲め能く輸入超過額を決濟して尙ほ多大なる餘りあるによるのであります。試みに我國の海運に依る運賃收入を調べて見まするならば不景氣來の大正十四年に於て、尙ほ實に一億二千萬圓で我國としては誠に重大視すべき國家的收入なのであります。遠く海外に於て日章旗の下に活動しつゝある我船舶乘組員の勞を多とすべきでありますが、同年の英國の夫れを調べまするとと。實に十三億圓で我國の夫れの十倍を超へて居ります。海は東西に隔てゝ居りまするが、同じ海國民としての英國人の活動は誠に羨望に堪へぬ次第であります。

以上「海國民の使命」について私の考への大要を申上げましたが、最後に現在我海運界に見出されて居る缺陷の

二三を申上げて置きたいと存じます。

其の第一は船舶の素質が餘り善くないと言ふ事であります。之れには造船費用が高かつたり、金融關係に不備があつたりするに原因して居りましようが、兎に角老齢船卽ち年を取つた船と速力の遲い船が多いのであります。

第二には最近急激に增加して來ました彼の「デイゼル」船の燃料である所の液體燃料卽ち石油の產額の少ない事であります。燃料は實に船の費用の大部分を占めて居りますもので、之を安價に求め得る樣なことにならねば世界的競爭に勝つ事が困難となるのであります。

第三は最も根强いものでありまして、夫れは國民的に海事卽ち海に關する事の理解が少ないと言ふことであります。

世上日本は四面環海の島帝國であるとか、東洋に於ける英國であるとか云ふ人はありますが、海運が我國運に以上申上げた樣な重大な使命を持つて居る事を根本的にはつきりと理解信念して居る方々が少數であるのを遺憾に思ふのであります。

私如き職に海事教育にたづさはる者は大いに此の方面に努力精進致し度いと常々念願して居るものなのであります。

以上申上げました樣に、海運は我國に取りましては誠に重大な決定的な使命を有して居るのでありまして我同胞卽ち私の所謂海國民たる諸君は何らかの形式に於て海洋に働くべき使命あることを自覺せられて、以て我國の基礎

を更に確固不拔なものならしめて、庶幾は永久に萬世一系の　天皇を仰ぎ奉り東海の日出づる君子國たらしめ度いと思ひまして、敢て此の「マイクロフオン」の前に立つた譯であります。

御淸聽を感謝致します。

思想善導に關する一私案

（本稿は昭和三年七月文部大臣岡田良平閣下に提出したるものなり）

〔主　旨〕

思想善導に關しては大臣閣下始め諸官各位の御苦心御辛勞は、さこそと存じて居りますが、之れに對する一私案卽ち教育に宗教を採り入れる必要を申上げたいと存まじす。

〔理　由〕

教育の目的が、人間の智能を啓發し、德器を成就して、社會國家の爲めに、有爲なる人格を作るにありまして、宗教の理想が實在不滅の精神に生きて宇宙の遍流の生命に歸命し、古今を通じて變る事無く、萬邦に施して悖らない處の大道に合致した生涯を送り、そして、この遍流の生命を各自の人格の上に體現するにある事は申すまでもありません。

隨ふて私の思ふ處では教育と宗教とを相離反せしめないまでも、從來の如く、獨善的に各々別々の途を進ましめて置きましては、人間究竟の目的である處の、完成された社會的人格＝一個人として同時に日本國民としての確固たる信念を持した＝の出現は、なか〳〵に望み得ないとするものなのであります。

舊幕以來、萬般の事物が總べて啓蒙の氣運を以て進んで參り、近來經濟上の推移や生活の事情やが益々現實主義に成つて參つた今日、只單に現實の生活に處して有益な資格を作る爲めの教育を受けたのみでは完全な人間をつくる事は到底望まれますまい、然るに最高學府である大學令第一條を見ても、

大學は國家に須要なる學術の理論及應用を教授し竝其の蘊奥を攻究するを以て目的とし兼て人格の陶冶及國家思想の涵養に留意すべきものとす

とその目的が規定されてありまして人格的方面の陶冶が第二義に置かれてあることは今日の如き國家社會の實情に顧みて一考すべきことではなからうかと思ひます。

假令ば學校の盟休事件でも思想上種々不都合な出來事でも又更に惡化して金甌無缺の我が國體の變革すらさへも考へるに立ち到ります事は正に徒に實利的な、現實主義に囚はれて、我が國從來の美風なりし、知恩報恩の所謂宗教的情操の涸渇によつて心情の荒寥に基因すると思ふのであります。

元より人間社會に現實主義も必要ではありますが、其處に理想主義が無いならば人心は如何ばかり干燥無味、蕭條落寞たるものとなるでありませうか。勿論現時の教育も德育の方面に於て人間としての理想の涵養に、細心の注

意を拂はれてはゐるでありませうが、併し人間の理想は次から次へと連續して生れて參るものでありますから更に高い宗教的理想を人々の心に奥深く植え付けて行くことは洵に大切な事と思ひます。

是れ、私が教育と宗教とを相提携融合せしめて人間社會にうるほひのある樣に致し度いと思ふ理由であります。

前きに申述べました如く、教育は主に人生の社會的方面を目的とし、宗教は主に個人的方面を理想とするのでありますが、教育と宗教とが何處までも各々獨自的なもので相馳背するものならば互に相容れ得ない事にもなりませうが、苟も個人の集積が社會である以上社會を目的とする教育と個人を單位とする宗教とは相倚り相援け以て善き個人から成り立つ良き社會の出現を待つべきであると思ふのであります。

卽ち信仰を持たない道德をのみ高唱したり宗教を除いた教育をのみ隆昌ならしめても、現に降り掛つて來てゐる處の思想問題の如きを解決するのは至難であらうと思ふのであります。

長くも教育に關する勅語が我が國民教育の大本であり同時に我が國民道德の大精神を宣べさせられ給ふてゐる事は申すまでもありません。

然かし之れ亦宗教的の情操信念が無いならば勅語の大精神を理解し、その大精神を心性に體現服膺活用し得るとは誰も直ちに言ひ得ないと思ふのであります。

長多き事ながら一例を申しますならば、

大正天皇陛下御卽位式の當時賜はりましたる詔勅の中に「祖宗の神靈照鑑上にあり」と言ふ御言葉が御座いますが

之に依つて前段仰せられた御言葉の意味をお強めになつて居るのであります如斯御言葉は神靈の實在不滅を信ずるのでなければ其の御精神を正しく良く諒解する事は出來得ないと思ふのであります。私は斯樣な大切なる點に至りましては教育による理論のみでは理解せしむる事は至難な事に屬すると思ふのであります。

のみならず萬邦無比の我が帝國建國の神秘を宗教的信念を離れて普く國民に理解せしめんとすることは思はざるも亦甚だしいことゝ謂はなければならなからうと思ふのであります。

彼の古人が伊勢大廟に參拜して讀まれた歌「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ」といふ樣な情操が理屈を絶して躍動し來る心境を味ひ得る如き心性を、幼時より養ふ樣に宗教的環境を作る事が極めて肝要であると思ふのであります。

今や國を擧げて憂慮せられて居る思想問題の如きに對しては正に日本人としての信念を確保し高明なる信仰の至誠を保有した人格の養成こそ最も必要な事であると思ふのであります。斯樣な境地は唯單に修身倫理其の他の學科目を增加したり其等の教授方法を改善したのみでは恰も源を清めずして百年河清を待つに似て居ると思はれるのであります。

大要上記の理由に依りまして左記具體案二、三を申述べ度いのであります。幸に御考慮を得て一日も早く其の實現に進まれん事を希望して止まないのであります。

〔具　體　案〕

一、幼年時代より敬神崇祖の觀念、宗教的情操を陶冶する目的を以て延喜の古に則り國家的に神社統一の理想を畫

して國祖伊勢大廟の別社を日本全國の各地に祭奉りて式祭日等には幼稚園長、小學校長は園兒生徒等を引率して參拜する樣致され度きこと。

能ふべくんば全國各幼稚園並に小學校の校庭に國祖伊勢大廟の別社を造營し奉り校長指揮の下に全校生徒をして朝拜せしむること受持教師指揮の下に各級各別に朝拜するも可。

二、明治三十二年文部省訓令第十二號の爲め青少年時代相當永き學校教育を受くる期間に於て宗教的環境に在る機會を尠なからしめ爲めに重要なる基本觀念作爲の時代に於てそれが情操を持つことを妨げらるゝを以て之れに相當の改正(參考として左に改正私案文を錄す)を加へられ中學校は元より上級學校に至るまで課程外に於て生徒各自の選擇による宗教の研鑽をなし前陳の情操信念を養成する樣奬勵せられ度きこと。

文部省訓令第十二號改正私案文

一般ノ教育ニ於テ宗教的情操ヲ涵養セシムルコトハ最モ必要ナルモ既成宗團ノ外ニ特立セシムルハ又學政上必要トス故ニ官立公立學校及ビ學科課程ニ關シ法令ノ規定アル學校ニ於テハ既成宗團ニ依ル宗教教育ヲ施シ又ハ儀式ヲ行フコトヲ得ズ。

但シ課程外ニアリテハコノ限ニアラズ。

三、右に付き各學校に於ける知名宗教家の講演を奬勵し、之に要する費用を特別の方途に於て支出し以て助成され度きこと。

以　上

精神教育の基調

緒言

現代我日本各般の物質文化は、實に燎爛として百花その妍を競ふが如き觀を呈すれども、仔細に國民の精神生活方面を靜觀する時、斯くの如く徒に物質文化に眩惑しつゝありて、精神文化を省りみず、此儘に放置し、安閑として消日推移して果して可なりや。との危惧の念なき能はざるは、極めて明白なる事實なり。見よ、今日の社會人心、過去數十年の科學文明に惑溺し、何時しか、唯物的功利的思想を抱懷し、個人としても、國民としても、無理想にして、利己主義に陷り、國家民人將來の爲めに盡さんとする犧牲奉仕の念なく、刹那主義的に、生活する者益々多きを。之れこそ正に社會各方面に浸潤したる時弊なれ。今にして此の時弊を匡救せざるに於て國家の前途果して安泰なりと言ふを得べきや否や。職に教育にたづさはる余等思ひを深く此處に致さゞるべからざるを思ふ。最近論議せられつゝある教育の實際化の如き、或は宗教の再吟味の如きも、小乘的功利的思想による應急處置的に改革立案するが如くんば、決して國家百年の大計として策の得たるものにあらず。教育も宗教も、窮極に於て國家安泰人類幸福の爲のものならざれば不可なる事言を要せず。以下之れが對策として、余が常に抱懷する處を敍述して、以て大方の示教を仰がんとする所なり。

現代の時弊

此處に於て、前述せる時弊につき尙ほ亘細檢討せんに、現代社會は餘りにも物質本位にして、利己心に漲り、國家の安泰人類の幸福を齎らすべき利他心、若しくは犧牲的精神の缺乏せるを見る。彼等は社會より奪ふこと、獲ることのみを考へ自ら社會に與へんとする念極めて缺如せり。而して學を修むるもの愈々增加して思想益々混亂し、科學愈々普及して道義益々衰ふるの奇觀を呈するの狀態に在り。

是れ智識のみならず、道德までも小乘的、功利的、實利的に墮せんとしつゝあればなり。

其の實例としては、曾て鹿兒島造士館長たりし故岩崎行親氏が『教育の普及したる處程、農村が疲弊して過激思想が盛んである』と、云はれたる由なるも、現在の我が國を靜觀する時遺憾ながら其言の適中せる事を知る。例へば、本州中部某縣は人の知れるが如く、教育の最も普及せる地方なるも、思想は非常に惡化し土地も大に疲弊し居れり、之れに次いで、比較的教育の普及せるは、九州某縣なるも、此地方亦過激思想者流の中心なる由にして、斯くの如き例は尙ほ一二にして止まらざるなり。

所謂智識階級者の腐敗墮落に關しては、頃來世人を驚倒せしめたる昭和大疑獄事件、若しくは政黨財閥等の現に最近公表せられたる不公正、非愛國行動に於て之れを見得べく、某重大事件の海軍被告に關する公訴狀には『……現代日本に於ては、政黨政治家、財閥及び特權階級など何れも腐敗墮落して、國家觀念なく日本をして政治、外交經濟、軍備、思想など各種の方面に行詰を生じ、國家滅亡の虞あるに至らしめたりとし、此が革新の要ある旨を說

き國家革新を目的とする一團を形成して、直接行動に依る非合法運動に從事することゝなれり……』とあり、尙ほ其の詳細なる經過乃至心境は、其の公判廷に於て各被告等が腹藏なく、純情のほとばしるまゝに、怯めず臆せず吐露しつゝあり。敍上の不公正、非愛國的行動が感激性の强き青年を如何に憤慨せしめしか察するに餘りあり。勿論國憲を紊り、國法を破りし被告等に對しては、公正なる裁判を經て峻嚴なる懲罰を見るべけんも、現代社會道德の弛緩墮落せる狀態は、誠に深憂に堪えざる處なり。かくの如き狀態を釀成するに至りたる事は、社會全體の連帶責任とせざるべからざると共に眞に憲政の美果を收るには前途尙ほ程遠しの感なき能はず。

されば近來國民思想の動搖に對し、其の對策が種々の方面に亘りて研究せられつゝあるも、思想對策の根本は敎育にありとなし、各種の議論も結局皆茲に落着するを見る。宜なりと言べし。而して、知と德との關係については知に徹する時は、其所に信念を生じ從ふて情意も陶冶せらるべしとなし、卽ち、深き信念、厚き情意は十分なる知の背景、否な寧ろ知其の物と相表裏する不可分の關係にありて初めて活躍するに至るとなし、全人的の陶冶を主知的に論ずる人あり。

是れ眞に知に徹すれば、全人的完成を期待し得べき筈なるも、今日の實際國民敎育に於ては、斯くの如き眞知に到達し得ること極めて困難なり。故に指導者たるものは、此處に思ひを致し、全人的陶冶の上には、情操敎育の極めて重要なることを知らざるべからず。情操敎育には、先づ宗敎的情操を養ふを第一となし、潤ひのある氣分を釀成し、而して知解を進むることの適切順當なる道筋なることを理解するを肝要なりとす。

時弊の根源――物質文化の効罪敎育の缺陷

然らば斯の如き時弊の根源及び敎育の缺陷は何れより來りしものなりや、これ德川幕府末期まで非開國孤立的國家なりし我が國が、俄然として國際的に進出するの氣運の生ずるに至るや、著しく西洋諸國に比較して物質文明の幼稚なるを意識し、物質文明の輸入吸收に專念するに立ち到り、之れが爲め明治初年以來物質科學主義の敎育に全力を傾注し、精神方面を第二義に置きたるに因る。然かしながら、之れありしが爲め開國後僅々數十年にして世界先進國を瞠若たらしむるに至りし文化程度を增進するを得たりしなり。

精神方面を第二義に置きたりと前述せるも、その事實は最高學府と稱せらるゝ大學の大學令第一條に

『大學は國家に須要なる學術の理論及應用を敎授し、竝其の蘊奧を攻究するを以て目的とし、兼て人格の陶冶及國家思想の涵養に留意すべきものとす』

と、其の目的の規定せられたるに見るも明らかなり。然かしながら今日の如き國家社會の實狀より顧みて、人格的方面の陶冶が第二義に置かれあることは一考すべきことゝ思ふのみならず、此大學令の後段『兼て』以下は其の前身とも云ふべき帝國大學令には記載なかりしものなるを見ても如何に當時物質文化輸入に汲々たりしかを明瞭に物語るものなり。然しながら、現在余等が以上の如き論をなすも、明治維新の頭初に於ては、我國の文物が歐米諸國の夫れに比し著しく劣れるを直覺し、燦然たる物質文化の基礎をなせる科學主義に則らんとしたるは誠に當然なりと言ふべし。

當時此方針に依り教育し、又教育せられたる人々は、尙ほ孤立せる東洋君子國たりし舊日本の雰圍氣に育成せられたる人々にして、之れ等の人々は、主として儒教若くは佛教等に培はれたる日本精神に頭腦を養成せられ居たり。從つて此等の人々が新文明の爲めに努力を積みたる結果として、大いに國運を伸張し、よく列强の間に伍するに至り、科學の方面に於ても長足の進歩を爲し、特に各種工業、軍事、醫學等の方面に於て世界の各國人を驚嘆せしむるに至りしものなり。

然るに、明治末期大正の時代を經て昭和の今日、續々學校の校門を出づる卒業生は、既に舊日本に於ける如き精神主義の持ち合せなく、全然斯る素養に於て缺如せるのみならず、其の教へらるゝ所のものは全然科學主義なるを以て、彼等の精神の傾向は常に現實主義、功利主義に墮し、形而上の高き理想に向ての憧憬の念慮なきに至りしも寔に無理からぬ事と云ふべし。現に我が日本國も、非開國、孤立的舊日本より脫出し、國際的日本となりて既に幾多の年月を經過せるも、由來我が日本帝國は世界に冠絕せる國體を有せる天孫民族なる事を信念せざるべからず。如何に科學思想、國際道義を高調するも、結局は國家安泰人類幸福の爲めのものならざるべからず。余が前陳せる教育も宗教も其の最高目標を此處に置かざるべからずとせるも、正に之れと同義なり。而して　明治天皇陛下が新日本建設の途上、明治二十三年十月教育勅語を煥發せられて、國民教育の歸趨を明かにせられたるは、　明治天皇が當時此點に如何に御軫念あらせられたるや、思ふだに畏き極みなり。

畏くも教育勅語は我が國民教育の大本にして、同時に我國民道德の大精神を宣べさせられ給ひしところなるは申

すまでもなきことながら、科學的雰圍氣の中に生長せる現時の青年に取りては、勅語の大精神を味識し、之を體得し、其の大精神を心性に體現活用し得ることは餘程困難の狀況にあらざるなきやを惧る。

要するに現今一般青年の通弊と認むべき點は、其頭腦が唯物的に偏し形而上の話說を受入るべき情操の涸渴せることとなり。勿論現時の教育に於ても、道德方面に於て人間としての理想の涵養に注意を拂ひつゝあるも、夫れが心の琴線に觸れて强き共鳴を與へ得ざる處に重大なる考慮を要すと思惟せらる。

如何にして時弊を匡救すべきや——精神教育の必要

叙上の如く時弊の因りて來れる處を沈思認識し、一方之れが匡救に就ては朝野を擧げて深甚なる考慮を要する處にして、之れが對策として余は特に精神教育の必要を高調して止まざる所なり。而して精神教育を徹底せしむるには、教育と宗教とを相提携融合せしめて、人間社會に潤ひある如くすることの必要を痛感するものなり。徒に信仰的根底無き道德をのみ高唱するが如き、或は宗教を除外せる教育をのみ隆昌ならしむるも決して時弊を匡救し、光輝ある我が國體を擁護し、民族の繁榮に力を致す人々の出現は困難なりと言はざるべからず。故に學校教育に於ても精神教育を其の根幹とし、之れに各般の智識を教授するを以て本體とするの必要なるは言を俟たざる處にして、次いで如何にして精神教育を實踐せんとするや、實に重大なる問題なりとす。

我邦の如く既成宗教の雜然として對立せる處に於ては、學校內に於て宗教を取扱ふことの困難なるは明瞭なれども、社會人としての國民が、若し宗教的教養を全然等閑に附するならば、第二の社會人たる子弟に施す國民教育の

缺陷は將來一層著しく曝露すべき事あらざるべきや憂慮に堪えざる處なり。

故に社會及家庭に於ては、出來得る限り宗教的教養を推奬すると共に學校内に於ても、宗教への指導に努力せしむること極めて肝要なりと思惟す。精神教育に宗教情操を根底とすることは、恰も種を播くに必ず土壌に肥料を與ふるが如く、先づ學生々徒の心胸に宗教的情操を涵養するの極めて重要なることは余の深く信じて疑はざる處なり。

如何にして宗教情操を涵養すべきや

眞の宗教的教養は幼兒よりの家庭教育に俟たざるべからず。即ち「ペスタロッチー」の云ひし如く『母の胸や父の膝に於ける幼兒時代』より始むる必要あり。余は胎教の大切なることを信ずるものにして、此意味よりすれば既に母の胎内に在る時より母の信仰が胎兒に及ぼす影響の大なることを信ずるものなり。故に一般家庭に於ける日常生活に於て、兩親は先づ神佛に朝禮夕拜の習慣を附し、子弟をして之れに模倣慣行せしめ、或は神社參拜展墓等の機會を力めて多からしめ、形而上の世界を不識不知の間に認識せしむる事極めて肝要なり。其の禮拜の時機は離床就寢、食前、食後或は子弟の誕生日祖先の命日等の機會を以てし、其の方式に至りては、各家庭の信仰により神佛耶の何れに依るも不可なかるべし。

頃來我が文部省に於ても精神教育の徹底に力めらるゝ處極めて多大、將來此れが効果を期待して止まざる處なり現に本年五月同省内に開會せられたる實業專門學校長會議に於ても、積神教育に徹底せしむる具體的方案に關し諸

問せられたり。此れに對し余の回答陳述せる要領は左の如し。（前文は省略す）

（一） 家庭に於て宗教(信仰)的環境を作る事

宗教的情操を涵養するには、幼年兒童時よりする必要あるを以て、各家庭に國祖天照皇大神を齋き奉る神棚を造置し、父母は自ら朝夕之を禮拜し兒童をして模倣せしむる事は將來精神教育を徹底せしむる上に極めて肝要なり。

右に付き文部省は各家庭に神棚の造置方を奬勵し、之を全國に普及する樣指導誘掖せられんことを望む。

（二） 幼稚園、小學校には國祖天照皇大神を齋き奉る社宇を築造し、園長、校長を初め職員生徒をして朝拜せしめ時ある毎に（國家の一大事等の場合）祈念拜謝の禮を行ふこと。

家庭と相俟ちて右の如き行事は其の効果を增大し、天與の兒童の崇高なる心靈生活の發芽助成に寄與する所大なるべし。

右に付き文部省は之れが實現方を考慮せられん事を望む

（三） 中等學校以上の學生々徒に對する之が方策は、左記

（イ） 世間一般迷信を打破し正信の必要を高調すること。

（ロ） 教師をして宗教的理解と教養とを持たしむること。

（ハ） 生徒をして宗教的講演を聽かしむること。

（ニ） 生徒の宗教的研鑽に對し書籍等を選擇し援助を與ふること。

（ホ） 生徒をして宗教的大人に接觸の機會を與ふること。

（ヘ） 生徒をして宗教的大人の入信の動機を知らしめ入信後の心境、生活態度、人生に對する識見等を知らしむること。

等種々あるべしと雖ども、現代青年は前述の如く唯物的に墮し形而上の話說を受け入るゝ情操なきもの多く、今直ちに其の効果を擧ぐる事の困難なる所以なりとす。故に迂遠に似たれども前陳せる家庭的環境を經、更に幼稚園小學校に於て朝拜の慣習等を經驗體得せる幼少年の生長を俟つに非らざれば、眞個の精神教育の効果を擧ぐる事困難なりと思考す。（以上）

尙ほ明治三十二年、文部省訓令、第十二號の爲め青少年時代相當永き學校教育を受くる期間に於て、宗教的環境に在る機會を尠なからしめ、爲に重要なる基本觀念作爲の時代に於て其れが情操を持つことを妨げらるゝを以て、之に相當の改正を加へ（參考として左に改正私案文を錄す）られ中學校は元より上級學校に至るまで、課程外に於て生徒各自の選擇に依る宗教の研鑽を爲し、前陳の情操信念を養成する樣奬勵せられたき旨數年前文部大臣宛意見書を提出せり。

文部省訓令第十二號改正私案文

一般の教育に於て宗教的情操を涵養せしむることは最も必要なるも、既成宗團の外に特立せしむるは、又學政上

必要とす、故に官立公立學校及學科課程に關し法令の規定ある學校に於ては、既成宗團に依る宗教々育を施し又は儀式を行ふことを得す。

但し課程外にありては此の限にあらず。

尙ほ宗教的情操の涵養につきては、昭和五年一月中央教化團體聯合會より發表せられたる要綱あり要領を得たるものなるを以て、參考として茲に揭げん。

宗教的情操養成の方法

（一） 一般的方法

イ、人格の力に依る方法

直接的には宗教の信仰に篤い人、高潔なる人格者が、被養成者に對して慈愛と親切と聰明とを傾け、身を以てこれを率ゐること、間接には被養成者の崇拜する理想的人物を活用し、讃仰生活を營ましめること。

ロ、社會の力に依る方法

寺院教會の如く宗教的情操養成に更に一歩を進めて居るものは言ふまでもない、祭禮、祭日その他信仰に關する民間の習俗及び活動寫眞、劇、讀物など被養成者に宗教的影響を與へることは少くない、しかし社會は教育の場所でもあり非教育の場所でもある樣に、宗教的な場所でもあり、非宗教的な場所でもある、從つて若し社會に敬虔な空氣が濃厚であるならば、そこは最も適當なる宗教的情操養成の道場となる。

ハ、自然の力に依る方法

熱、光、空氣、水その他自然が生物に與へる恩惠の多大なることに依つて神佛の愛又は慈愛を說き被教育者をして神佛に對し敬虔にして依憑する念を盛ならしめることが出來る。朝暾東に上る時、夕陽西に春つく時、五彩燦爛たるあの光景は、何人をも神秘の境に誘ひ去らずには置かない、又檢微鏡下に現はるゝ美觀と驚異的事實とは。崇高なる宗教的經驗を味はしめずには置かない。

(三) 特殊的方法

イ、幼年期

三歳位より六歳位までの年齢で、まだ宗教意識の成り立たない時代であるから、その自覺に訴へて宗教的情操を養成することは出來ない。

一、父母は朝夕これを神佛の前に伴ひ、禮拜を模倣せしむること。

二、朝夕父母長上に敬禮せしむること。

三、食事毎に合掌默禱若くは箸を頂かしむる等の作法に依りて、感謝の念を起さしむること。

四、幼兒のための童話、音樂、劇、活動寫眞等は宗教的のものを選ぶべきこと。

五、小鳥に餌を與へ、盆栽に水を灌がしめるなどのことに依りて、動植物愛護の念を誘導し、且つ自然界との接觸をなさしむること。

ロ、少年期

七八歳より十四五歳までの年齢で友人と喧嘩したり、動物虐待したりするなど、主我的感情次第に強く、英雄崇拜の傾向及び社會性も現はれて來る時期である。

一、神社佛閣に參拜敬禮せしむること。

二、英雄崇拜の傾向を祖先崇拜超人格崇拜に誘導すること。

三、主我的感情を自他相愛に誘導すること。

四、社會性を助長して友情を涵養し、共存共榮のため奉仕的實行をなさしむること。

五、山間生活海岸生活を行はしめて、大自然の威力と恩惠とを滿喫せしむること。

ハ、青年期

十六、七歳より二十三、四歳までの年齢で、思想生活も、情意生活も共に發達して幼年期に與へられた宗教的習慣もこゝに始めて自覺的內容を具有するに至る時期である。

一、宗教的信仰の知的方面、卽ち宗教に關する知識を授くること。

二、宗教、哲學、人生の諸問題に關する研究の指導を爲すこと。

三、懷疑煩悶の解決に力を添へること。

四、愛他心を助長せしめること。

五、社會奉仕の精神を旺盛ならしめること。

二、成　人　期

二十四五歳以上の成人で、概して身心發達を極め、理解、反省、實行等に於て殆ど缺くるところの無い時代である。聞思修の三方面よりその宗教的情操の向上不退を圖るべきである、卽ちこの期に於ては他からも養成せられ自らも養成するのである。

一、寺院教會その他に於て不斷に說教講話等を聽聞し又は宗教的著書を讀破すること。

二、或は靜座、或は觀法、或は凝念、或は默禱その他の方法によりて瞑想思惟すること。

三、自己の行動云爲を苟も非宗教的に陷らしめないこと。

ホ、各期を通じて

一、畏敬尊重(勿體ない)、感謝報恩(有り難い)、仁慈博愛(氣の毒)の念を旺ならしむること。

二、祭禮、祭日、彼岸、盂蘭盆、招魂祭、法事、追悼會、墓參、弔問、理科祭(犧牲動物弔慰)等に際して感謝報恩の誠を致さしむべきこと。

三、偉人祭、卽ち、灌佛會(花祭)、成道會、涅槃會、クリスマス、釋奠(孔子祭)その他宗教的偉人の記念日に儀式を行ひ、尊崇畏敬の意を表せしむべきこと。

四、宗教的制裁、卽ち天罰或は因果應報の理を悟らしめ神佛は正を愛し、邪を憎み、善を勸め惡を懲すものなることを信ぜしむべきこと。

五、自己過信の迷妄を打破すべきこと。

六、信教自由の意義を理解せしむべきこと。

七、他人の信仰に敬意を表せしむべきこと。

八、迷信に囚はしめざること。

九、物心一如の境に安住せしむべきこと。

如何なる宗教を信奉すべきや

我が國民は憲法によりて信教の自由を附與せられ居れり。凡そ信仰は其の人の家庭、生活、環境、機緣等によりて信奉する宗教宗派多岐に分れ入信の動機亦各人各樣なるべし、然しながら信仰も一方個人的感情個人的慰樂等多分に或は全然、個人的要素に立脚すと雖も、他方日本國民としての全人的陶冶を目標とするの必要なるは言を俟たざる處にして、信仰も亦全く國家安泰人類幸福の爲めのものならざるべからず。

此處に於てか宗旨がよく我が國體の成立依存の根本と矛盾撞着せざる底のものならざるべからざるを思ふ。

此の意味に於て顯本法華宗機關雜誌『立正運動』の出現するに至りし根元たる立正大師の信仰を余は鑽仰して止まざる所なり。

結　言

要するに、精神教育は今日に於て國民指導精神の上に之れほど重要なる緊喫なる事項は之なきものと信ず、故にそれが實際的効果をあらしめんが爲めには、幼少年時代より精神教育の基調として宗教情操を涵養し全人的完成に努めしむるを以て最とすと思考す。

信仰の對象に就きては、日本國民的、國家的認識を誤らざる樣の最大の注意を要すべく、斯くして甚だ陳腐なる言に似たれども、意義は常に新しく、我日本帝國をして永久に眞の意味に於ける東洋の君子國、宇內最勝の國家たらしめんことを念願して止まざる處なり。

實業教育五十年を回顧し海國民の使命を思ふ

一、維新の大業……新日本への門出
二、明治初年の國策……新日本の目標
三、四民平等……教育の機會均等
四、普通教育の普及
五、實業教育の擡頭……實業教育の任務及種類

六、半世紀の實業教育の實績
七、精神教育の必要を强調す
八、特に海運の任務に就て
九、我が海運政策
十、優秀海員の必要
十一、結　言

世界に國家を成すもの六十有餘ありますが、人々に貧富の別あると同じく國家にも强弱の差があるのは申すまでもありません。何れの國家でも法律的に考へるならば、夫々平等である筈でありますが、世界の國際外交場裡に於きましては、强國唱へて弱國之れに隨ふ不平等の事實を否定する事は出來ませぬ。由來大國は强大なる實力を擁するものであります。卽ち一國の兵力の强弱、財力の大小、人口の多少、土地の廣狹國民の精神の如何などが其の實力の要素となるものであります。

斯の如き實力を抱擁する國家ありとするならば其の國家こそは卽ち大國としての榮冠を戴けるものであります。大國と小國との差はかくて生ずるのであります。

過去一世紀の歷史に於て世界の大國たりし英國、露西亞、佛蘭西、普魯西、墺太利、西班牙、瑞典、葡萄牙の內西班牙瑞典葡萄牙の三國の如きは明に大國たるの地位を喪失し、之れに代つて米國、及び伊太利の二國が新たに大

國の列に加はつたのでありました。而して最も新しく大國の列に就いたものは、東洋の一角から突如として國際場裡に嶄然頭角を表はすに至つた我が大日本帝國であります。

彼の世界大戰前まで大國として以上の八國を數ふるに至つたのでありますが戰敗國たる墺太利、獨逸、露西亞の落伍によつて、今や日、英、米、佛、伊の五大國を算するに至り特に日、英、米を以て世界の三大强國と稱せらるゝに至つたのであります。國民と致しまして誠に欣快の至りで御座います。

顧みるに我が日本帝國は建國以來約二千六百年の星霜を經過し、上に萬世一系の天皇を戴き國運愈々發展駸々乎として進んで止まないといふのは萬國に冠絶したる實に尊貴なる存在であります。

「ローマは一日にして成らぬ」と言ふのは眞理でありまして、我が日本帝國が明治維新以後偶然に進步發達を遂げたものではありません是れは實に三千年に近い歷史を有する舊日本の文明と日本國民の品性の上から生れ出た處の忠義と孝行卽ち我が國固有の國民道德とがその土臺を爲したのでありまして、其の永き間に蓄へられた潛勢力は蓋し少々ではなかつたのであります。この時に英明なる　明治天皇の御治世となりまして、孤立の舊日本から國際的新日本として歐米の文明に接觸しまして俄然表現せられたる現勢力となつて歷史上未曾有の新日本の進步發達となつたのであります。

さて此の潛勢力は如何にして蓄へられたのでありませうか、我れ人のみならず殊に歐米人が興味を以て知らんとする處でありませう。

此處に其の由來する處を詳說する時間を持ちませんが要約すれば我が建國の御精神が眞善美を極めさせられた御事更には上歷代天皇が御仁慈に涉らせられた御事、從ふて下國民が飽くまで忠良でしかも應用進取の才智技能に富んでゐたからと思はれるのであります。

維新後に於ける敎育は幾多の變遷を經て發達したものでありますが畢竟するに國是の發展擴充に外ならないのであります。

明治天皇陛下には維新の始め國是を定めさせ給ひまして天下に公示せられました、卽ち

一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ。

一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ。

一、官民一途庶民ニ至ルマデ各其ノ志ヲ遂ゲ人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス。

一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クベシ。

一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スベシ。

如斯公明正大なる國是に從ひ政府は銳意諸般の施設を經營し國民亦よく其の御趣旨を體して眞に上下一致して國運の隆昌を希圖したのでありました。

爾來外交上の事又內政上の事總べて範を此の五ケ條に採られる次第でありまして維新以後に於ける總べての大なる改革變更は皆　明治天皇の御發意に依らぬものはないのでありまして今更ながら　天皇の英明に感激を覺ゆる

次第であります。

教育の制度も亦實に此の國是に基づいて經營せられたものでありまして、歐米諸國の思想を取り容れて拮据經營長足の進歩發達を遂げて面目全く一新するに至つたのであります。

明治五年我が國教育制度の礎とも言ふべき學制が頒布せられたのでありますが其の時に布告せられた學事奬勵に關する被仰出書を拜讀致しますると其の御精神がよく拜承出來得るのであります。卽ち其の內に

……學問は士人以上の事とし農工商及婦女に至つてこれを度外におき學問の何物たるを辨ぜず……之れを學ぶに宜しく其の旨を誤るべからず之れによつて今般文部省に於て學制を定め近く規則をも改正し布告に及ぶべきにつき自今以後一般の人民(華士族、農、工、商及婦女子)必ず邑に不學の戶なく家に不學の人なからしめん事を期す……

と仰せられておらるゝのであります。

誰でも一度外國に遊んだことのある人は歐米諸國の諸制度と我が國の制度とを比較して其の中でも日本の方が寧ろ進步してゐると思ふ事は、日本の警察の嚴肅なる事、郵便の親切なる事、鐵道の正確なる事、一般教育の普及してゐる點に氣が付く事でありませう。

殊に教育が今日の如く世界有數の狀況にまで普及したのは全く　明治天皇の御思召によつたものでありまして維新以前は唯士大夫をのみ教育して夫れ以下に及ばなかつたのでありますが、維新後四民平等の觀念を植え付けられ曾ては僅か四十萬の武士に限られたる教育は維新後に於て國民全體の教育となつた事によるのであります。

さて維新によつて生れ變り世界の空氣にふれた新日本の國民の眼にうつゝたものは歐米先進國の高度に發達した物質文明でありました。當時旣に學術の開發技術の進步によつて出來上つた絢爛たる泰西の文物制度は眞に當時の我が國人士の驚異そのものであつたのであります。

故に從來孤立した舊日本帝國が國際場裡に於ける國家としての體面をそなへ、歐米諸國の文明程度にまで進出するためには、先づ以て國民全體の智的方面の水準を高める事卽ち政治、法律、科學、教育等の各部門に於て學識才能あり手腕力量ある指導者の輩出に力めねばならなかつたのであります。斯の如き有樣でありましたので明治初期の教育が國民の一般教養、高級指導者の養成に急がしかつたのも無理からぬ事であり之れがため普通教育第一主義となつてゐたのも當然と言ふべきでありませう。

卽ち小學、中學、大學、等の普通教育系統が維新後逸早く制度化されたるにも不拘未だ實業教育を顧みるに遑がなかつたのでありますが當時の國狀としては誠に無理からぬ事と言ふべきでありませう。從つて實業教育が制度化され組織化せらるゝに至つたのは實に明治十六、七年頃の事でありまして普通教育制度制定後十數年を經過してからの事であつたのであります。

此の如く實業教育の制度化が普通教育に較べまして十數年立ち後れたのみならず所謂舊日本時代よりの傳統的偏見によりまして學問を何となく高尙なもの、職業を何となく卑俗なるものと考へるの風があつたために職業を目的とした教育卽ち實業教育を功利的な卑俗なもの、傍系的なものとして考へたのでありませう。世人が實業學校よ

りも中學校高等學校の方を高尚なものと見てゐた樣な傾向のありますのも之れが爲めであつたのでありませう。

元より學問は高尚なものである筈でありますが同時に職業が卑しいと言ふ理由は少しもないのであります。

殊に現在の我が國の如く世界產業國として第一流の地位を占むるに至りましたのも實業教育五十年の効績に負ふ所至大なものがあるのは明々白々な事實であります。尙ほ此の上とも產業日本國として一大進展を致すべく益々實業教育の重要性を一般に認識せしめると同時に教育內容の改善を計り優秀なる靑少年を好んで此の方面に志願せしむる等の事が極めて重要な事と思ふのであります。

以上極めて概略ながら明治維新以來七十年我が新日本への歩み來つた處を回顧したわけであります。

而かも其の歷史は實に孤立日本より世界的日本への國民的努力の歷史でありまして此の間營々努力一圖に只管に歐米先進國の文化吸收に力めて來たわけであります。眞に此の數十年間の我が國の物質文化の發展はすばらしいもので軍事方面を初め、各種工業、醫學等の方面に於て世界各國人を驚嘆せしめるに至つたものであります。

然かしながら此處に考へねばならぬ重大な一事があるのであります。卽ち我が國の將來を背負ふて立つべき現代の靑少年諸子の精神教育の必要についてゞあります。世の中の狀況は前にも申しました樣に華やかなる物質文化萬能時代でありますので彼等の見るもの聞くもの殆んど總べてが實證的な實利的な科學主義でありますので、これらの人々の精神の傾向は常に現實主義巧利主義に走り易く從つて形而上學的の高き理想に向つての憧憬乃至人格的教養に對する關心が少なくなるに到りましたのも當然の歸結といふべきでありませうが是非共彼等に人として誠に重

要な半面である精神生活の必要をさとらしめ其の修養に力めさせねばならぬといふのであります。こゝには單に精神教育の極めて必要なる事を强調するにとゞめ之れが理想及び具體的方法等については又いつの日か申上げて見たいと思ふて居ります。

さて此の機會に於て私は海事教育者と致しまして、將た又我が國有數なる開港場をひかへた阪神間の在住者と致しまして、實業教育の內特に海運に關するものを申上げて見たいと存じます。

今を去る事約三百年前英國の先覺者サー・ウオルター・ラレー氏は「海洋を支配するものは貿易を支配すべし世界の貿易を支配する者は世界の富を支配すべし旣に世界の富を左右する以上は世界そのものを支配すべし」と呼稱したのでありますが、古來の歷史を繙けば其の言の誠に適切なるを知る事が出來るのであります。卽ち古代の「フエニキヤ」、「アテネ」、「サラセン」、中世の「ノルマン」、「ハンザ」更には近世に於て「ポルトガル」、「オランダ」、「フランス」、「イギリス」、等の海上の覇者を數へ來つて見れば、孰れも其の時代に於て世界の覇者ならざりしものはないのであります。

然らば何が故に海運が國家の隆替と密接なる關係があるのでありませうか、之れ卽ち海運が國防上及國民經濟上重大なる割役を有するが爲めであります。

以下少しく之れについてお話して見たいと思ひます。

國防上商船隊が「陸軍の渡し船」「艦隊後の艦隊」「fleet behind fleet」として如何に重大なる使命を有するかは我

が國に於ける現前の事實として彼の日露戰役が雄辯に物語つて居ります。卽ち該戰役に於て我が商船隊が百萬の軍隊と之れに要する糧食彈藥を滿洲の野に輸送し、我が陸軍をして十分なる活動を爲さしめた事は彼の常陸丸の壯烈なる哀史と共に國民の腦裏に深く刻まれてゐる處でありませう。又一方海軍の補助機關として活躍した事は茲に一事例を擧げて見るならば不世出の海の軍神東鄕元帥をして世界の名將たらしめた彼の日本海大海戰に於て哨艦信濃丸が第一に發信した「敵艦見ゆ」との信號に於て見るも明瞭な事實であらうと思ふのであります。

更に又歐洲戰爭こそは國家の興亡が如何に自國海運の確保强大如何と密接なる關係にあるかを明確に證據立て居るのであります。卽ち「ドイツ」は開戰當初よりよく約四ヶ年に亘り東西の各戰線に聯合軍を威壓したるにも不拘、其の海上輸送力を喪失した爲めに遂に降服するに至り、之れに反して聯合國就中英國はあらゆる犧牲と努力とを拂ふて其の海上輸送力を維持した爲めに遂によく最後の勝利を獲得したのであります。

今日世界永久の平和の期しがたき以上軍備は誠に國家存立上重要缺くべからざる處であり、一方國防の經濟化が叫ばるゝ現在におきましては海運が海軍の補助機關たるの任務は益々重且つ大なるを加へたと言はねばならないのであります。我が國が將來世界第一流の國家として其の位置を保ちこの國民の誇りを長く持續しようとするには、唯々强大な軍備のみならず、所謂「國家の富强」を確保せねばならないと思ふのであります。卽ち强いと共に富まねばなりません、夫れには我が國狀として貿易の必要なる事は申すまでもありません而して世界の貿易の約八十パーセントは海上運送を通じて行はれてゐるのであります。尙ほ又海運が國民經濟にとり重要なる所以は海運が既に

獨立せる一つの產業たるが故であります。

輓近國際貸借改善が朝野に於て盛に唱へられて居りますが由來我が國は輸入超過國でありまして年々歲々多額な對外支拂を爲してゐるのであります。現に最近我が國の製品の海外進出が叫ばれてゐるのでありますが、依然として今尙ほ輸入超過國であるのであります。然らば如何にして之れが改善を實現し得るでせうか、唯單に國產奬勵のみにては決して輸出超過の國となすことは望むべくもないと思はれるのであります。故に國際貸借の改善にはどうしても貿易外の受取勘定の增加卽ち Invisible Export 見へざる輸出であります、これを計り之れに依つて輸入超過に因る對外支拂ひを決濟するより外に途はないのであります。

然らば現在我が國に於ける貿易外の受取勘定には如何なるものがあるかと申しますと、海運關係收入、來遊外人の國內消費海外事業の放資及び勞務利益、保險關係收入等が其の主要なるものでありますが、之れ等の內我が海運關係收支こそ其の首位を占めてゐるのでありまして、例へば大藏省調査に係る、昭和八年中に我が船舶が外國から稼いで來た海運關係收入は二億二千八百六十二萬六千圓に上り、同支拂は一億二百九十二萬八千圓となつて居ります。以上差引の純收入に於て一億二千五百六十九萬八千圓となり、同年の輸入超過額七千七百八十八萬六千圓を決濟して尙ほ餘り四千七百八十三萬二千圓を生み出してゐるのであります。

以上を考察致します時、海運が如何に重要なる產業であり國家經濟上不可缺の役割を演じつゝある事を考へ得る事と思ふのであります。海運が國家存立上極めて重要なる所以は實に敍上の通りであります。宜なるかな之れある

が故に世界各國は夙にあらゆる巨多の犧牲と多大なる努力とを拂つて自國海運の確立發展に力を致し海上制覇を目指しつゝあるのでありまして、現在英國の確乎たる制覇、米國の顯著なる進展、獨逸の驚異に價する海運復興、更には諸國、佛蘭西、伊太利等の進出などいづれも夫れ〴〵斯かる見地から出發してゐるのであります。

我が國に於きましても、政府及當事者は相携へて海運の進歩發展に努め、今や所有噸數に於ては世界第三位にあるのでありまして誠に欣快を禁じ得ないのでありますが、其の内容を仔細に研討するならば未だ十分ならざる點が少なからぬのであります。

希くば國民が海洋立國の外に途なき帝國の地位に顧みる處あつて、よく眞に海運の使命を知り之れが進出確保に一致協力せらるゝ處あつて一段の發展につとめる事は誠に國家焦眉の急務なりと言はざるを得ないのであります。

然して海運の實力は單に船の大小、並に多少卽ち隻數又は噸數のみでなく船齢船型及其の速力の如何に繫はり、又同時に如何によく其の全能力を發揮せしめ得るやにあるのであります。

卽ち一國の海運力とは表面上隻數又は噸數にはあらずして其の内容する處の實質上の問題であるのであります。

以上申し上げました意味から致しまして現今世界海運界に於ける我が國海運の地位を見まするに卽ち其の一艘毎の噸數、速力、年齢に於ては六、七、八位くらいになつて居るのであります。

今や我が日本帝國が世界五大强國更には三大强國の一として其の名譽ある位置を克く保持し、總べての點に於て英、米、佛、伊の各國と共に同一の地歩を堂々と占有し行くには固より我が國力の充實に一段の努力を要するや勿

論であります。然して其の國力充實の方途は官民一致内大いに產業を振作し外海外貿易を盛大ならしむるの外之れなき筈でありますが、我が國狀よりして我等國民が深く反省せざるべからざる一事は我が國が島帝國として國際地理的に比類稀なる形勝を占めながら產業國として廣く國際市場に雄飛せんには天然資源の極めて菲薄なる事實それであります。

今や我が國は歐米各國との國際的關係益々密接を加へ既に東海の孤立的存在を許さゞるの實狀にあり、此の點眞によろこぶべき事實ではありますが、今更に此の蕞爾たる島國の領土狹少にして天然の資源に極限あることを顧慮せざるを得ざるの狀況であるのであります。勿論頃來新興滿洲國との國交益々親交を重ね彼と我れと有無相通じ共存共榮の道が出來まして此の一大不安點を救濟し得た事は誠に御同慶の至りであります。

さて茲に新たに船舶が出來上つたと致しましたならば直ちに先づ之れに乘り組み之れを運航すべき船員を要するは當然であります。回顧すれば明治八年五月臺灣征討の役了ると共に時の内務卿大久保利通は大いに海運政策樹立の卓見を太政大臣に提出せられたのであるが既に優良海員の養成にも着眼する處あり「唯現時政府所有の船を外國人……獨り船長機關長のみならず重立ちたる水夫に至るまで……に依賴して運用するは實に政府商船管掌の旨にあらず良き海員……船長其の他の士官水夫を通じて稱呼す……を教育するは甚だ緊要に有之候に就き三菱會社に於て商船海員私學或は水火夫扱場を建設致候ときは其の補助金として一萬乃至一萬五千圓の金額を給與可相成見込に存じ候」と提唱せられまして其の結果として明治八年九月政府は三菱會社に命じて海員養成の爲め商船學校

及水火夫取扱所の設立を爲さしめ之れに對し年額一萬五千圓の助成金を下附すべく規定したのは實に是れ海員養成に關して本邦に於ける近代的政策の起源と看るべきでありませう。右に基きまして明治八年十一月三菱商船學校の設立を見自社船の乘組員を養成するに力めたのであつたが、明治十五年四月政府の管掌に移り東京商船學校と改稱し、爾來幾多の變遷を經て今日の東京高等商船學校としての盛大を見るに至つたのであります。又彼の歐洲大戰中神戸市川崎男爵家の寄附に依り設立せられたる商船學校があるのであります。同校は大正九年八月文部省の直轄に移り我が神戸高等商船學校となつて今日に及んでゐるのであります。

然かしながら由來我が國の航海技術は外國船員に負ふ處極めて多大なものでありまして、曾ては船長、機關長、一等運轉士、一等機關士の如き重な職員の殆んど全部は外國人であつたのであります。假りに我が日本郵船株式會社の船員に就て調べて見ますると、明治十八年創立當時所有汽船五十八艘總噸數六萬噸に對して外國人高級船員百七十四人、日清戰役後の二十九年二月末には九萬九千餘噸に對して同じく二百二十四人となつてゐますが、此の間多年培つて來た我が商船教育の進歩發達によつて、日露戰役に於ては我が國海員の功績は世界的禮贊の的となりまして、日本船員の信用を高めた事甚大なものがあつたのであります。大正年間の初期に至りましては、外人船員二十名内外に過ぎず、世界大戰後の大正九年世界第三位の海運國となつた其の時には船員としては一人の外國人をも見ぬ樣になつたのであります。今や日本船員の技倆は國際的にも年と共に信用を博しまして全く高等船員の獨立を確立し得るに至りましたもので、我が海運史上又海員教育史上特筆すべき一大慶事と思ふのであります。船舶は年

々歲々其の噸數馬力を增大し各設備に嶄新複雜なる器具機械を採用し、航路も亦所謂七つの洋にあまねく日章旗を翻へし昔日の船乘り式の教養學識にては今日では到底その運航に任すべくもなく、卽ち人格識見に於ても教養技能に於ても國際的優秀さを具有するの必要があるのであります。今や我が國の船員は世界的に自他共に容すの優良なる實質を具備し誠に波上の勇敢なる商人無冠の外交官たるの實を擧げつゝあるの狀況にあるのであります。しかしながら世界は日新月歩であります。今の儘にて止まる時卽ち退歩を意味するのであります。更に私共一段の奮勵努力を要するの時であると考へてゐるのであります。一方世界的の經濟界の不況の裡能く我が海運のみは世界的に優秀なる成績を擧げつゝありまして、他方國際軍備問題の重大なる時局に際し我が高等商船學校出身の高等海員は海軍豫備將校として不可缺の重大任務にもあるのであります。特に近時國際の時局重大の加重と共に海軍豫備將校にして現役將校として直接國家保護の重大任務に就くものあり。我が高等海員養成の使命愈々重要なるを思はしめてゐるのであります。

斯くの如く我が高等海員は平時にありては經濟界の雄者であり、非常時にありては直ちに軍務に服して挺身國難におもむくの責務があるのであります。誠に海國民として邦家の海運に盡す事は男子として快心のものがあると言ふべきでありませう。

之を要するに今や國家的一大躍進を試みんとして正に國際的に一大難局に當面せる我が國狀を自覺認識し、此の難關を突破するの決意と用意をもつて眞に世界に於ける第一帝國たらしめねばならぬと思ふのであります。

今日此の我が國實業教育五十周年の記念式にあたりまして、直接實業教育又は實業にたづさはつて居らるゝ皆樣の前で、過去をかへり見將來を思ひ海國日本の爲め益々實業教育の振興に力を致し、永久に此の光榮ある世界の强國大國たるの名譽と實質とを保持して行きたいものと存ずるのであります。

帆船で世界を一周した話

（昭和十年八月二十七日青年の時間に於て大阪中央放送局より放送したるものなり）

海によつて强大國となりまして現に世界第一の海運國でありまする英吉利は彼の歐洲大戰當時世界の汽船の四割五分を所有して優に世界海上貿易の一半を運送してゐたのでありますが、戰時中に其の三分の一以上を喪ひ、平和克服の際には世界總船腹の三割八分に低下しましたので英國民はやつきとなつて「英國海上權の非常時」と叫びまして、一日も早く戰前の優勢を挽回して世界海上貿易の一半を運搬するの程度には是非回復せしめざるべからずと絶叫したのであります。

當時の首相ロイドジョージ氏は、戰後の產業貿易方針に關する大演說中……

『戰前英國は世界貿易の約半分を輸送する處の一大海運業を有して居た。然かるに今や船腹大いに減じてしまつたのであるが吾人は我が英國の海運業を回復維持して更には一段と擴張して以て優勢なる商船隊を有するにあらざれば我英國の繁榮を望み得ないのは勿論途には國家存立さへも危ぶまざるを得ず……

卽ち一にも船、二にも船、三にも船』と大聲疾呼致したのであります。以上は海國に商船の必要なる事を雄辯に物語つてゐるのであります。

我が日本帝國は四面環海、由來「東洋の英國」と稱せられ、明治維新以來驚くべき長足の進步を遂げ今や三大强國の一として世界に重きをなしてゐますがその由來する處は尊き我が國の歷史にあるのは勿論でありますが、將來共に海を考へずに我が國の發展は考へられぬのであります。

さて近代的海國日本と致しましては歷史極めて新たらしいのでありますが、先覺者の卓見によつて將來の日本は海上にありとして既に明治八年東京高等商船學校が創立せられ、又大正九年には神戸高等商船學校の創立を見まして、今や世界的に優秀な船員を海上に送り出してゐるのであります、殊に優秀なる船長を養成するには自然力による帆前船の練習が極めて必要でありまして之によつて「細心の注意」と「不斷の忍耐」と「協同一致の精神」と而して又「旺盛なる體力」とを涵養することが出來るのであります。

わが日本帝國の將來を双肩に荷ふて居る青年諸君にも緣あらば海洋に出でゝ大いに海國日本の爲めに御盡力願ひ度いと思ふのであります。

さてこれから帆船で世界を一周した話に入りますが、その帆船と申しますのは現に東京高等商船學校の練習船たる大成丸の事でありまして、今を去る二十三年前私が同船に船長として練習生百二十五名を乘せて世界一周の遠洋航海を致した時のお話であります。

大成丸は今迄に二回世界周航を致しました。最初のものは期間約十ヶ月で全航程三萬〇九百海里第二回目は期間一年三ヶ月全航程三萬六千四百海里の遠洋航海でありました。本日は此の第二回目の世界周航について御話申上げ様と思ひます。兎に角一年三ヶ月の間帆前船でよち〳〵と風の間に〳〵航海して居つた話を三十分間に御話を申上げ様と云ふのですから餘程困難でありますので、最初に航路寄航地を極くさつと申上げて然うして航海中主だつた話二三を時間の許す限り御話致さうと存じます。

本船は四本マストバーク型總噸數は二四四〇噸であり小さな補助機關を備へて居ります。當時の乘組員は

船長以下職員	十三名
學生	百二十五名
普通海員	四十四名
乘組總員	百八十二名

でありました。

此の航海に大成丸が東京品川を出帆致しましたのは明治四十五年の七月初でありました。横濱、館山に寄港致しまして十八日午前六時館山を拔錨致しました。出帆後先づ北太平洋の風に乘つて東する事四十六日間八月三十一日朝北米「カリフオルニヤ州」「サンディエゴ」港に到着致しました。處が船長佐々木盛吉君には同港に到着後急病のために下船されましたので當時東京高等商船學校の教授でありました私が其の後任として乘船することになり急に

米國へ出張を命ぜられ取急いで日本を立ちまして十月十日夜大成丸が碇泊してゐる「サンディエゴ」に到着しまして直ちに乘船致しました。

私が日本から行くのを待つために本船の碇泊が大變永くなりましたが、十月十七日午前「サンディエゴ」を出港しまして蓋世の英雄「ナポレオン」によつて有名な「セントヘレナ」島に向ひました。此間の航路は北東貿易風に乘つて南方に下つて十一月七日午後西經百二十七度附近で赤道を通過南半球に入りまして南東貿易風で更に南へ〳〵と航海をつゞけ南緯四十度附近に達して此邊から西方の風に乘つて南米の南端「ケープホーン」に直航途中太平洋上で大正二年の新年を迎へまして船の上で四方拜を行ひ一月の七日天候不良の爲岬角は見えませんでしたが午前一時半頃音に聞えた天下の難所「ケープホーン」を繞航しまして南太西洋に入りました。

夫れから「セントヘレナ」島に向つて北航しましたが、同島の南方に於て風の方向及潮流が惡くてどうしても北上出來ないので餘り航海が永びきますために、止むを得ず一旦南亞弗利加の「ケープタウン」に寄港することに豫定を變更しまして、二月十二日の午後實に百十七日振に同港に入港致しました。

口では百十七日ですが、此の約四ヶ月間殆んど陸地を見ずに食料にしても青物生肉を食はずに過したのでありますが若い學生達にとつても隨分と永い苦しい事であつたと思ふのであります。

かくて「ケイプタウン」に二週間碇泊二月二十六日午前愈々「セントヘレナ」島に向け出帆南東貿易風に乘つて三月十五日午前「セントヘレナ」島の「ゼームスタウン」港に到着しました。同港から更に西航して南米「リオデ

ジヤネイロ」港に四月十六日午前入港五月三日「リオデジヤネイロ」を出港更に今一度南太西洋を横斷して「アフリカ」州の南端喜望峰の沖を航過して南印度洋に入り東方に航海しまして「オーストレリヤ」州の西岸にある「フリーマントル」港に八月二日朝入港之れより濠洲の西岸に沿ふて北航「ジヤバ」島の東「ロンボック」海峽を通過して「スンバワ」島の「ビマ」港及「アンボイナ」港に寄港九月二十五日午後赤道を通過して北半球に入り比律賓島の東方を北上十月十六日午後三時半房州館山に入港茲で外舷の御化粧等を致しまして同月十八日午前十一時五分に品川灣に歸着致しましたのであります。此の日數實に四百七十一日全航程三萬六千三百七十七浬でありました。

× × ×

次に航海中の主だつたお話を二三申上げます。

世界一の海上の難所として海員仲間に知られて居ります「ケープホーン」の廻航について簡單に御話致します。

「ケープホーン」は南アメリカ洲の最南端でありまして地球上人類の住んでゐる最南の岬角であります。大成丸が大正二年一月の初め此の岬角に近づきますると流石晋にきこえた地球上第一の難所らしくだん〳〵と天候が不良となりまして空模樣が頗る惡るく加ふるに氣壓はどん〳〵下つて來まして西北西の烈風となつて雨もつけて段々波浪も高くなつて來ました。大成丸の帆は三十二枚掛かゝる樣になつて居りますが既に「メイン、ロワー、トツプスル」と「フオアー、トツプマスト、ステイスル」の二枚の荒天用の丈夫な帆のみを殘して他の三十枚は悉くたゝみこんでありしかも一時間數浬の速力を出しました折柄の追波の打込むのを防ぐため機關に用ひた廢油を本船の兩舷

四ヶ所から海中に流しこみながら波浪を鎭め上甲板の出入口等は堅固に閉鎖され乘組員が波にさらはれぬ樣に「ライフ、ライン」は甲板上縱横に張り廻され大成丸式の荒天準備は遺憾なく準備されて居りましたが流石に「ケープホーン」の風と浪とは「海上の幕場」と稱せられて船員に怖れられ「海のアルプス」として海洋詩人に謳はるゝだけに物凄く荒れて風力は一時間八十海里にも達しましたが幸にも何等故障なく廻航を遂げました。

比較的靜かであるべき夏でさえ是でありますから冬季の「ケープホーン」航海殊に東から西に向つて回航するときの苦辛は考へて見る丈でもゾツトするのであります。ずつと以前の事ですが英國に於きましては海事會社で海員採用の場合に必ず志願者に對して「君は是れまで何度『ケープホーン』を廻つたか」と質問したものであります。又同國で冬季暖爐の前に海員が集つて談話をなしつゝある時「ケープホーン」通過の經歷を持つて居るものには大いに敬意を表して暖爐の前方の椽に脚を掛ける特權を與へられる習慣があつたと云ふことであります。

吾々が此前の世界周航のとき是の「ケープホーン」を廻航しまして「フオークランド」島の「スタンレイ」港に投錨しましたが其時英國の相當大きい帆船が三本の檣を折られ上甲板は破壞せられて見るかげも無い程悲慘な狀態で碇泊して居るのを見ました。聞けば「ケープホーン」の南東三百海里の處で强勢なる南西の颶と之れに伴ふ巨浪とに對し逆航西走せる際最初些細なる故障が原因となつて船は前に申した樣な狀態になり八九名の船員が重傷を負ひ輕ふじて「スタンレイ」港に救助されて來たと言ふ事でありました。

斯樣な光景からしても此附近は海員に對して唯一無比の鍛練場であることが首肯出來るのであります。私は幸に

も大成丸で此處を二度通航した事は技術上のみならず精神的にも大いに得る處があつた樣に思はれます。

× × ×

次ぎの寄航地「セントヘレナ」島について申上げます。

「セントヘレナ」島は御承知の通り千八百十五年夏蓋世の英雄「ナポレオン」一世がながされた南太西洋に於ける有名なしかし淋びしい一孤島でありまして、亞弗利加の海岸を西に距つること約千二百海里に在りまして東西約十海里南北約六海里に過ぎない小さな島であります。「ナポレオン」皇帝は配處の月を見る事六ケ年間常に英國官憲の殘酷なる待遇を憤慨して終に病に罹つて悲憤の涙に咽びつゝ永眠せられた所でありますが日本人にして此の島を訪れた人は極めて稀れな土地でありませう。

唯私共の行つた時から滿五十年前即ち文久三年の三月に德川幕府の海軍留學生として榎本釜次郎（後子爵になつた榎本武揚氏です）外八名の人々が和蘭の帆前船に乘つて此の地に寄航せられた記錄があります。此等の人々が幕末時代に於て日本を出發してから此所「セントヘレナ」に來るまでには非常な苦辛せられた事は想像にあまりありますがその時の記事を見ますると文久二年幕府で開陽艦を和蘭の國で造らしめました時に前に申述べました海軍留學生の諸氏が海軍兵學及航海造船の技術を學ばんため和蘭國に派遣せられましたので留學生諸氏は和蘭の帆船に乘つて長崎を出帆致しまして印度洋經由「アフリカ」の南端を迂回して太西洋に入り遂に和蘭の國に到ります途中此處「セントヘレナ」に寄航しまして「ゼームスタウン」の港より一里許の處に在る「ロングウード」の「ナポレオ

ン」の謫居を見物して歸り途に當時の稅關長でありました R. M. Pritchard と言ふ人の家に招かれて厚遇を受けましたとの事であります。

此の時には途中で一度は難破の厄に會ひ海賊の襲擊を受けたのありますが日本刀に大和魂の勇敢さを發揮して之れを擊退したり或は無人島に避難したりして具さに困難にぶつかつた樣子であります。私共が大成丸で同島に參りました時には豫て澤太郎左衞門樣の令息澤海軍造兵總監からの御依賴もありましたので五十年前の日本留學生一行の當地寄港の事を土地の人に調査して貰ひました處唯一人「ブリッチヤード」君の娘が生存して居ることを確めましたので私共は當時の一行と同樣に「ロングウッド」の「ナポレオン」の謫居を見物して歸り途に訪ねました所當時九歲でありまして今は五十九歲の老婆サンであります。

「ミッス、ブリッチヤード」が非常に喜んで心良く吾等を迎へて五十年前日本人の一行が受けたと同じ樣に「パナ、」其他の熱帶果物の饗應を受けまして當時の樣子を聞きました所當時九歲の娘であつた老婆のそろ〳〵と語る所によれば小供心にも嚴めしく丁髷を結てぶつ割き羽織に袴と云ふ異形の行裝をした一行は頗る深刻な印象を彼等に與へた樣でありますが殊に物騷な長短二本の帶刀は如何にも珍奇に如何にも殺伐に見えたと云ふて居りました其の時に一人の日本士官の書いたものだと云つて芳名錄の一頁を占領した紀念の花押を見せました長さ八寸横六寸の頁の四周には唐花模樣が絡み合つて其の中央に先づ和蘭語で吾々は文久三年の二月十一日に此の島を訪問したと記し其の下には右に年月日を左に一行の中の赤松、澤、伊東、內田、四氏の署名があつて最後に異つた手蹟で一八六三

年三月二十六日に「セントヘレナ」「カムブリアン、コッテエージ」を訪問した日本士官の署名と但書がありました。吾々一行は「ミツス、ブリッチヤード」を中央にして寫眞を撮して深く其の厚意を謝し手を握つて分かれました。

五十年前の同じ月に祖國海軍の歴々の先覺者が踏んだ足跡を國運の隆々たる二十世紀の今日世界最強の一海國民としまして稀世の大英雄「ナポレオン」の配所に見出したと云ふ事は吾々一行にとつて實に興味ある一事實であります。

× × ×

次に南印度洋の航海狀況を御話致します。

此の時の大航海は何れの航路も總べて相當に苦辛の多い航海でありましたが特に喜望峰の附近から濠洲西岸に近接するまで南印度洋一ヶ月半の航海程私共乘組員一同が苦辛を嘗めたことはありません。此所は一年内最惡の季節でありまして殆んど連日連夜荒天が打續きまして五日若は一週間目に一日晴天になつて直ちに諸濕物を陽にあてゝ乾かし艙口を開ひて船内に乾燥した空氣を流通せしめて衛生に注意すると其の翌日から又々荒天となつて波浪が打込むので直ちに甲板諸艙口を閉鎖する殊に猛烈なる颱が引切りもなく來襲しまして大分帆を破られましたが殊に造つた許りの荒天用帆二枚を寸斷せられ同じく二枚を甚しく破られましたのには實に困難致しました然して「總員上エー、合羽用意」の號令毎日〳〵明けても暮れても幾度か掛かつてくるのには乘組員も精神的に肉體的に打擊を受けた爲めでせうか折柄寒冷な氣候にも拘はらず七十餘名の脚氣患者を生ずるに至りまして遂には七月十三日には乘

組學生倉辻不羈丸君又同月三十日には同田村蔣君が相ついで脚氣衝心のために有爲の才を抱いて空しく航海途上不歸の客となられました事は何と云ふ殘念なことでせう。尙又七月十六日には大工吉田猪右衛門君が肺炎のために逝去せられまして私は船長として前後三回此のなくなられた人々の水葬の式を暴風雨の中に行ひましたが實に陰慘な氣分にとらはれました。曩に「サンデイエゴ」に碇泊中腦膜炎のために急逝せられました三等運轉士山田寅次郎君と合せて此の四君に茲に謹んで哀悼の意を表する次第であります。

田村學生の今はの際に「吾魂は如來の御手に委せつゝ骸は娑婆の人のまに〳〵」と云ふ歌を名殘に、逝かれましたことを思ひ出して今も涙を催すのであります。

本船は「フリーマントル」出港後段々北航して赤道に向つて行くので暑熱加はつて參りますので多數脚氣患者については大に懸念致しましたが幸にも日本に近づくに從ひ病勢衰へて來まして房州館山に着致します時には一名の患者もない樣になりまして不幸中の幸福でございました。

以上申し上げました樣に海上生活者としては陸上の方々の到底想像し得ざる辛勞苦痛もあれば又一方海上生活者にあらざれば經驗し得ざる天然の美しさ、いかめしさ、うれしさにも接することが出來るのであります。卽ち精神的肉體的に奥深い人生を味ふ事が出來ると思ふのであります。此の大航海に行つた百二十數名の卒業生の大部分は現在立派な卽ち歐洲航路アメリカ航路等の大汽船の船長として海國日本の爲めに活動されてゐるのであります。其の外水先案内となつてゐる人自ら汽船會社若しくは運輸會社の社長たる方或は日本海員組合の副組合長となつて居

る方商船教育に従事する方海事官となつてゐる人等我が國海運界の錚々たるものになつてゐるのでありますが此の人々の所感をたづねて見まするに其の人々の人格を作る上に於て不屈不撓の精神を作る上に於て大成丸の大航海こそ第一番に有意義であつたと申して居らるゝのであります。誠に練習船の生活の尊いことが今更ながら分るのであります。

以上を以て私のお話を終了致します。

海員精神の鍛錬に就て

（本稿は昭和十一年八月三日文部省主催商船學校教員夏季講習會に於て講演したるものなり）

「海員精神の鍛練に就て」と云ふ演題の下に、御話をする樣にとの御希望でありましたが、元來精神教育とか、精神訓練とか云ふ方面のことは、其の實際の效果を擧げますることは極めて困難でありまして、遠く其の根源に溯つて御話をする必要があると存じます。或は題目が海員と極限されて居りますので、私の話しますることは題目を離れて居るかの感を抱かれるかも知れませぬから、豫め大體の輪廓を御話し申上げて置く必要があらうかと思ひます。私は嘗に海員と云はず、如何なる職業に從事するものでありましても、先づ日本國民として、世界に比類なき立派なる此の日本帝國に、生を享けたる幸福を充分に自覺することが、第一であると思ひます。常に感謝の念がな

く、不平不滿の内に生活して居るものに向つて、如何に立派なる教育を施さうとも、又如何に完備せる訓練を行ふとも、決して其の效果を擧げることは出來るものではありませぬ。何んとなれば精神がは入らぬからである、魂がは入らぬ所に決して效果が顯はれる筈はないのであります。然らばさう云ふ自覺を促にはどうしたら善いか、又さう云ふ話を受入れる氣分を造ると云ふか、情操を養ふには、如何にすれば善いか。次には世の中を渡り萬事を處理して行く上に於て、中道を歩ましむるには如何にすべきや。儒教に云ふて居る「允に其中を執る」とか、孔子の云はれて居る「中庸の道」は、誠に大切であつて、理想と現實の間に能く調和を保持して、左に傾かず右に偏することなき樣に力めなければならぬのであります。

一體精神教育のみでなく、全般に亙りて、我が國に現はれて居る高等海員となるべきものに對する教育は、八ケ間敷く云へば、色々意見はありますが、大體に於て其の施設に於ても、亦其の教育方法に於ても、學理と實習が相伴つて居りまして、相當に良いと信じて居りますが、然らば其の效果は遺憾なく充分に擧つて居るかと問はるれば殘念ながら否と答へざを得ないのであります。お互に此等の點に關しては、充分なる研究と、又其の實施の上に一段の精進努力を必要とする次第でありますが、私は自分の常に抱懷する意見を茲に御話し申上げて、御參考に供したいと存じます。

◇

偖て、現在我が國の物質文化は、各方面とも著しき進歩發達を遂げまして、誠に花園に色々の美しき花が澤山咲

き亂れて居る樣な壯觀を呈して居ります。軍事方面を初めと致しまして、各々の工業、醫學等の方面に於て、世界各國人を驚嘆せしむるに至つて居ります。

お互關係の方面を見まするならば、我が國產業貿易の著しき發展に伴ひまして、國防上國民經濟上、重大なる役割を勤めて居りまする海運は、非常に力强きものでありまして、海運の國際純收入最近の趨勢を見ますれば、昭和七年は不況にたゝられて、九千九百萬圓でありますが、昭和八年には一億二千六百萬圓に達して居り、昭和九年には一億五千七百萬圓に激增致しまして、我が國際貸借の均衡に盡した功績は實に莫大なるものであります。

世界の各國は、日本商品の世界市場進出に脅威を感じて、關稅の障壁を高くするとか、輸入割當又は輸入許可制を實施しまして、極力日本品の輸入阻止を圖つて居りますから、自然之からは貿易上に打擊を受けるのみならず、海運收入の上にも、相當なる影響あることは覺悟せなければなりませぬが、兎に角、明治維新以後、我が國が斯の如き異常の躍進を遂げましたのは、抑も何に原因するかと申せば、明治元年三月、卽ち維新の初め　明治天皇が國是を御定めになつて、政治、法律、軍事、敎育乃至諸般の事項について幾多の改革が行はれ、又幾多の進步を見たるに依るのであると存じます。

其の國是と申しまするのは、卽ち御承知の通り、五ヶ條の御誓文であります。

書き物を見ますと、　天皇は公卿諸侯を率ゐて之を天地神明に誓はせられ、以て王政復古したる維新政府の大方針を定めさせられた。曰く

『五ヶ條ノ御誓文

一、廣ク會議ヲ興シ、萬機公論ニ決スベシ。

一、上下心ヲ一ニシテ、盛ニ經綸ヲ行フベシ。

一、官武一途庶民ニ至ルマデ、各其ノ志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ、倦マザラシメンコトヲ要ス。

一、舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基ヅクベシ。

一、智識ヲ世界ニ求メ大イニ皇基ヲ振起スベシ。

我ガ國未曾有ノ變革ヲ爲サントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ、天地神明ニ誓ヒ、大ニ斯國是ヲ定メ、萬民保全ノ道ヲ立ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ』

と仰せられてあります。卽ち　明治天皇は天地神明に誓はせられて、確乎不拔の御決心を以て、其の實行を期せられたのであります。

又御誓文と同日、臣民をして聖旨を奉體せしめんが爲め、更に宸翰を下し給ふて居ります。

明治元年三月十四日の御宸翰

朕幼弱を以て猝に大統を紹ぎ爾來何を以て萬國に對立し烈祖に事へ奉らんと朝夕恐懼に堪へざるなり竊に考るに中葉朝政衰てより武家權を專らにし表には朝廷を推尊して實は敬して是を遠け億兆の父母として絕て赤子の情を知ること能はざる樣計りなし遂に億兆の君たるも唯名のみに成り果て其が爲に今日朝廷の尊重は古へに倍せしが

如くにて朝威は倍襄へ上下相離るゝこと霄壤の如し斯る形勢にて何を以て天下に君臨せんや今般朝政一新の時に膺り天下億兆一人も其所を得ざるときは皆朕が罪なれば今日の事朕自ら身骨を勞し心志を苦め艱難の先に立ち古烈祖の盡させ給ひし蹤を履み治績を勤めてこそ始めて天職を奉じて億兆の君たる所に背かざるべし往昔烈祖萬機を親らし不臣の者あれば自ら將として之を征し給ひ朝廷の政總て簡易にして此の如く尊重ならざる故君臣相親み上下相愛し德澤天下に洽く國威海外に鄰きしなり然るに近來宇内大に開け各國四方に相雄飛するの時に當り獨我國のみ世界の形勢に疎く舊習を固守し一新の效をはからず朕徒に九重の中に安居し一日の安きを偷み百年の憂を忘るゝ時は遂に各國の凌侮を受け上は列聖を辱しめ奉り下は億兆を苦しめんことを恐る故に朕ここに百官諸侯と廣く相誓ひ列祖の御偉業を繼述し一身の艱難辛苦を問はず親ら四方を經營し汝億兆を安撫し遂には萬里の波濤を開拓し國威を四方に宣布し天下を富岳の安きに置かんことを欲す汝億兆舊來の陋習に慣れ尊重のみを朝廷の事と爲し神州の危急を知らず朕一度足を擧れば非常に驚ろき種々の疑惑を生じ萬口紛紜として朕が志を爲さざらしむる時は是れ朕をして君たる道を失はしむるのみならず從て烈祖の天下を失はしむるなり汝億兆能く朕が志を體認し相率ゐて私見を去り公議を採り業を助けて神州を保全し列聖の神靈を慰め奉らしめば生前の幸甚ならん

今は詳しく申上る時間の餘裕を持ちませぬ、過去六十九年間、我が國の進み來つた事績を一々檢討せらるゝならば、國運の隆昌を見るに至りましたることは、誠に故なきにあらずと感激に堪へぬ次第であります。

◇

併しながら、此處に考へねばならぬ重大なる一事があるのであります。維新に依つて生れ變り、世界の空氣に觸れた、新日本の國民の眼に映じたものは歐米先進國の高度に發達した文明でありました。當時既に學術の開發技術の進歩に依つて出來上つた、絢爛たる泰西の文物制度は、眞に當時の我が國人士の驚異其のものであつたのであります。

西洋諸國に比較して物質文明の幼稚なるを意識しまして、物質文明の輸入吸收に專念するに立ち到りますと、自然爍然たる物質文化の基礎を爲して居りまする科學主義に則らんとして、科學主義の教育に全力を傾注しまして、精神方面を第二義に置く樣になりましたことは誠に無理からぬことであります。

精神方面を第一義に置きはせぬと云はれるかも知れませぬが、其の事實は、最高學府たる大學の大學令を見れば能く御判りになります。大學令第一條に

『大學ハ國家ニ須要ナル學術ノ理論及應用ヲ教授シ、竝其ノ蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ、兼テ人格ノ陶冶及國家思想ノ涵養ニ留意スベキモノトス』

と、其の目的を規定せられて居るのを見ても、明かであります。此の大學令の後段『兼テ』以下は、其の前身とも云ふべき帝國大學令には記載されてなかつたことを見ても、如何に當時物質文化輸入に汲々たりしかを明瞭に物語るものであります。

當時此の方針に依りて教育を爲し、又教育せられたる人々は、尚ほ孤立せる東洋君子國たりし、舊日本の雰圍氣

に育成せられたる人々でありまして、是等の人々は主として儒教若は佛教等に培はれたる日本精神に頭腦を養成せられて居りましので、從つて是等の人々が新文明の爲に努力を積みたる結果として、相當に國運の進展に貢献せられたることゝ思はれますが、明治末期より大正の時代を經て昭和の今日に至るまで、續々學校の校門を出づる卒業生は、既に舊日本に於ける精神主義の持ち合せなく、全然斯る素養に於て缺けて居る許りでなく、其の教へらるゝ所のものは物質科學主義であり、彼等の見るもの聞くもの殆んど總てが實證的な實利的な科學主義でありますので、是等の人々の精神の傾向は常に現實主義、功利主義に走り易く、形面上の高き理想に向つて憧憬の氣分とか、人格的教養に對する關心が少なくなるに至りましたのも、當然の歸結と云ふべきでありませう。

明治天皇が、此の點に御軫念あらせられて明治二十三年十月、教育に關する勅語を渙發せられまして、國民教育の歸趨を明かにせられました。

長くも教育に關する勅語は、我が國民教育の大本でありまして、我が國の歴史的精神、國體精華、及び凡て是より出發する國民道德の大本を御教示遊はされて居るのでありますが、物質科學的雰圍氣の中に生長致しました、現時の青年に取りましては、勅語の大精神を味識し、又體得し、其の大精神を實際に活顯しますることは餘程困難の狀況にあるのではないかと惧れる次第であります。要するに現今の一般青年の通弊と認むべき點は、其の頭腦が餘りに唯物的に偏して居りまして、所謂形面上の講話や說明を素直に受入るべ情操が涸渴して居ることであります。勿論現代の教育に於きましても、道德方面に於て、人間としての理想の涵養について、細心の注意を拂ひつゝ

あるのは事實でありますが、夫れが直ちに心の琴線に觸れて强き共鳴を與へ得ない處に重大なる缺陷がある樣に思はれるのであります。先年菊池男爵は英國教育會の招聘に應じて、英國に參りまして、日本の教育方針は教育勅語に基くことを講演せられましたとき、英國知名の學者、教育家は菊池男爵の講演に感激して日本國の國體の淵源が宏遠にして、國民教育の確乎不動なることを羨望しまして、英國にも日本の如く據りて以て立つべき大方針あらば、國民教育上如何ばかり有益であらうと云つたと云ふことであります。西洋人でも斯樣に能く判るのであるから、現時の日本の青年も、受け入れる情操があり、氣分があれば判らない筈はないのであります。元來物質文化は、我が國は西洋には及ばないが、精神文化に於ては彼に勝ること數等でありまして、我が國の過去二千六百年の歴史の內には此の點に關して明かに認むることが出來るのであります。教育勅語に「國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ」と仰せられて居る如く、肇國宏遠にして、歴代の天皇は至仁の德を垂れ給ふて、國民は萬世一系の天皇を奉戴して、至誠を盡して御仕へ申して來つて居るのであります。皇統一系連綿として二千六百年續いて來たと云ふことは、單に年數が長いと云ふことを以て貴いのではない、是れは御血統と道統が並存して長く續いて居る所に、非常なる貴さがあるのである。日本は肇國のそも〳〵の初めより、德を以て國を樹つ、卽ち道德立國であるから御血統と道統とが並び存して來て居ることが、注意を要する重要なる點であります。日蓮上人は、「日本國の王となる方は、天照皇太神の御魂の入り替らせ玉へる王なり」と申されて居ります。私は日本の國體の力が、種々なる方面に强い力を以て、影響を與へて居ることを認むるのであります、一二の例を申せば、佛教の如き印度に起つて、支

那を經て日本には入つて參つたのであるが、日本に於て初めて大乘的全分の光を放つて居りまして、更に之が日本佛教となつて、丁度天陽が東天に登つて西方を照らすが如く、今將さに西の方を照らさんとして居ります。基督教の如きも、日本には入つて著しく日本化して居る樣であります。又儒教の如きも、支那が本場であるが、其の道が實際に支那に於ては普く行はれて居らず、却つて日本に於て全分の光輝を發揮して居る狀況にあるのであります。此の世界に比類なき國體と、光輝ある歴史とを持つて居る立派なる國に生を享けたる幸福を靜かに考へるとき、國民たるもの、何人か感奮興起せざるものがありませうか。八田知紀の歌に

いくそたびかきにごしてもすみかへる
水や御國のすがたなるらん

と詠じて居ります。是れ水の本性の清きを以て、我が國體の美なるに比したるものであります。

日蓮上人は、「我が日本國は、一閻浮提の內、月氏漢土にも勝れ、八萬の國にも超えたる國ぞかし」と云はれて、此の立派なる國に生を享けた幸福を思ふとき、實に感謝の念に滿たされ餘りの嬉しさに涙が止め度なく出ると申されて居ります。

◇

然るに現下の實際の狀況は如何でありませうか、青年海員の如きも、常に種々なる點に於て不平不滿を抱いて居る樣であります。斯樣なる狀況の下に斷じて誠心誠意船の爲めに、又會社の爲めに、從つて國家の爲めに盡すと云

ふことは出來ぬでありませう。仕事の能率の上には相當大なる影響あることは明瞭であります。勿論會社の方で待遇の上に又昇給等についても、相當に考慮してやらねば結局損でありませう。又之は海員に關することではありませぬが、陸上の諸會社に於て、智識才能優秀なるものであつて、仕事には充分經驗を積んで來たものであつても、中々課長級とか重役には尙更進めない、卽ち上が詰つて居る。之も位置が少ないとか、又種々なる事情があるから、止むを得ないことでありませうが、重役には停年制を採用するとか相當考慮を拂つて、若いものに明朗なる氣持で働かしむる必要があると思ひます。最近三井系の諸會社では此の停年制を定めた樣でありますが、之は結構だと思ひます。然し現時の青年に對して思ふ所を率直に申しますれば、前に申した樣に、飛切に立派なる國に生れて、職に就いて、飯を食つて、子供等を敎育して行かれる限り、實に幸福なることはないのでありますが、要するに大體の氣分を思ふ儘に述べれば、最も少なく働いて、最も多くの收穫を得ようとする橫着な考へであります。——尤も之は今の經濟の原則に叶つて居るのかも知れませぬが、佛敎に說く因果の理法から云へば、間違つて居るのであります。佛敎は因果の理法を說いて居ると云つても誤りはないと思ひますが、其の說く所は、宇宙は因果の理法に因つて支配せられて居る。若しも其の理法を無謀にも打破つて、生活を仕樣とするならば、私達の日常生活は、必ず破綻を來すものであると云ふのであります。此の因果の理法から云ふなれば、最大の努力を拂つて最大の收穫を得ると云ふ方針を以て世の中を渡らねばならぬのであります。又成るべく贅澤に暮らしたいと云ふ氣分が元となつて、種々の不平が出で來る樣にも思はれますが、色々不平を言ひ出すと、際限がないもので、遂にとゞの詰りは、

自分で自分を不幸のドン底に陥して仕舞ふ様になるものであります。

然らば之が對策は如何にすべきかと云へば、どうしても精神教育を徹底せしむるには、宗教と提携融合する方法を採らねばならぬと信ずるのであります。宗教的情操に由りまして、人間の個人生活、社會生活に於て心の内に尊い潤ひを持たしめる様にせねばならぬと思ふのであります、故に徒らに信仰を根底とせざる道徳ばかりを高唱したり、或は宗教を除外せる教育ばかりを、如何程隆昌ならしめましても、決して前申しました様な時弊を匡救し得るものではない。必ず精神教育の根幹として心の肥料である所の宗教的情操を持たしめ、然る後海員になるものであれば、海員として必要なる各般の智識を授けたり、又は技業の練習をなさしめ、或は其の技業の練習を通じて、精神訓練をなさしむることを以て本體とすることの極めて必要なることを思ふのであります。然らば如何にして精神教育を實踐せんとするや、即ち如何にして宗教的情操を涵養すべきやと云ふことが、次いで起る重大なる問題であります。

我國の如く、既成宗教が多く對立して居る所は、學校内に於きまして、宗教を取扱ふことの極めて困難であることは明瞭でありますが、困難だから必要でないと言ふのではありません、現在將來とも若し宗教的教養を全然等閑に附するに立ち至る様なことがあるならば、軈て次の時代の社會人である所の青少年の精神的缺陷は將來一層著しく曝露すべき事があることゝ誠に憂慮に堪へないのであります。

でありますから、社會及家庭に於きましては出來得る限り宗教的雰圍氣を造り、之が教養を推奨しますと共に學

校内に於きましても、宗教情操を與へるべく其の方への指導に努力することが極めて肝要であると思ふのであります。

私が是迄精神教育を徹底せしむる爲めには、宗教情操を根底とする必要を申し述べて來た理由は、丁度農夫が畑に種を播くに必ず先づ土壤に肥料を與ふるが如く、先づ學生々徒の心胸に宗教的情操を涵養せねば、決して全人的完成と云ふ實を結ばせることが望まれないと深く信ずるが故であります。

◇

次ぎに宗教情操を涵養するには、如何にすべきか、以下具體的に、私の考を申上げて見ませう。眞の宗教的教養は、幼少の頃からの家庭教育に俟たねばなりませぬ。彼の有名なる愛の教育家ペスタロッヂーの言はれた様に「母の胸や父の膝に於ける幼兒時代」から始める必要が御座います。私は胎教の大切なることを信ずるものでありますが、此の意味からするならば、早くも母の胎内に在る時から、母の信仰心の態度極めて大切なることを信ずるものであります。

故に一般家庭に於ける日常生活に於きましても、兩親は先づ神佛に朝夕拜禮の習慣を持續して、子弟をして之に模倣せしめ、遂に之が習慣となる様に致し度いと思ふのであります。

一方神社の參拜とか、先祖の墓參とかの機會を力めて多く作りまして、所謂形而上の世界を不識不知の間に認識信仰せしむることが、極めて大切であります。其の禮拜の時機は、或は子弟の誕生日或は祖先の命日等の機會を以

てし、其の形式方法等については、各家庭の信仰によりまして、神、佛、耶の何れに依るも固より結構と存じます。

ヘルバルトと云ふ人は、「教育は元來家庭に於てなすべきものなれば、人の兩親ほど最も自然にして、且つ最も好適なる教育者はあらず」と云はれて居りますが、私も其の通りだと思ふのであります。私自身の幼兒時代を振り返つて見ますと、田舍のことでありますが、兩親が毎朝井戸側で、顏を洗つた後に、東天に向つて日の出を拜んで居るのを見て、自分も其の眞似をして居つたことが、後年宗教氣分を持つべく影響を受けた樣な氣が致すのであります。

今少しく具體的の方法について順を追ふて私の考を申述べて見ませう。

第一に家庭に於て宗教的信仰的環境を作り、子供等をして夫れに慣れしむるに至らしめる事、之には只今申しました樣に、幼年兒童よりすることが必要でありますから、各家庭に我が國祖　天照皇太神を齊き奉る神棚を造置して父母は自ら朝夕之を禮拜し、兒童を模倣せしむることは、將來精神教育を徹底せしめる上に極めて肝要であります。

私の家には、階下には　天照皇太神を御祭りした神棚があり、二階には佛壇がありまして、私は毎朝佛壇の前で禮拜讀經して、夫れから神棚の前で拜禮する。而して三度の食事毎に、其の初めと終りに合掌することに定めて居るのでありますが。其の合掌するときに、日蓮上人の御遺文にある「天の三光に身を暖め、地の五穀に神を養ふこと

皆之れ國王の恩なり」と云ふ語を想ひ起して居ります。是の三光と云ふのは太陽と月及星であります。

子供の樣子を見て居りますと、八歲か九歲頃までは、兩親の爲す所に模倣して拜禮を實行致しますが、夫れより段々實行しなくなりまして、中學に入る頃には食事の時分に合掌することすらもしなくなります。其處で小學校の先生の力を借りると、誠に是れが工合よく實行出來るのであります。只今私の內には私の住んで居る大阪府下南河內郡の藤井寺の尋常高等小學校に通つて居る子供がありますが、其の受持先生は、只今申上る樣な、實行カードを勵行致して居ります。小學校の生徒に對する先生の力は實に强いもので、大分怪しくなりかゝつて居りました拜禮の習慣は此の御蔭で又每朝確實に實行する樣になりました。

其の實行カードと云ふものは

でありますが、之に類似のものが他の多くの小學校で實行せられては居りますが、其の項目の內に「朝日を拜む」「神詣で」を設けられて居る

實行カード

項目	起床後の注意				歸宅後の注意			
日	早く起きる床を上げる	朝の挨拶	齒を磨く	深呼吸	朝日を拜む	神詣り家の手傳	豫習	復習
1	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○
2	××	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○
3	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○×	○
4	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○
受持教師の印 父兄の印								

歸宅後の注意			
無斷で遊ばぬ	お金を使はぬ	家の手傳うがひをする	夜の挨拶早く寢る

ことは注目すべき點であつて、誠に結構であると存じます。例にある通り、毎日實行したるときは○印をつけ、不實行の場合は×印をつけて、月末には「父兄の印」の所に捺印して兒童は學校に携行して受持の先生に渡す、受持の先生は檢印すると云ふのであります。先達て該校々長を訪ねて、其の話をして御禮を申し述べ、尙他の學級にも實行を御勸め致して置いた次第であります。

第二に、は幼稚園小學校等には、國祖　天照皇太神を齋き奉る社宇を築造して、園長、校長を初め職員生徒をして朝拜せしめ、國家に一大事等のありし場合、祈念を凝らす拜謝の禮を行ふことが實行される樣希望致したいと思ひます。此度二・二六事件の始末も大體終了し、戒嚴令も解かれましたので、宮中におかせられても、七月二十二日三殿に御親告の儀を行はせらるゝと同時に、神宮及山陵に御奉告の儀を行はせられたと云ふことであります。又日露戰爭の際は　明治天皇伊勢神宮に御參拜ありて、戰勝奉告の御祭祀あらせられました。又遠くは　後宇多天皇の御代、弘安四年五月に、元の來寇ありましたとき、天皇は大納言藤原經任を勅使として、伊勢神宮に祈請を捧げ、龜山上皇も亦大神宮に祈り、身を以て國難に代らんと乞はせられ給ふたと云ふことであります。

近來小學校では、毎月一日とか、十五日に日を定めて各學級が一團となつて、各學級別に鎭守の神社に參拜致して居る樣でありますが、之も結構でありますが、成るべくは立派なる對象を選ぶ必要がありますから、國祖天照皇太神を御祭り致したいと思ひます、客月十八日の讀賣新聞に、下谷池ノ端七軒町の忍岡小學校の運動場の片隅に立派な社殿が出來上つた。此の神社は同校の安藤校長が、日頃から學童に敬神の念を植ゑつける爲め、修學旅行など

も特に伊勢を初め有名な社寺のある地を選んで、機會あるごとに學童達を聖域の空氣に觸れさせて居たが、學校內にも神殿を設け、毎朝全學童に參拜させたら、尙一層敬神の念がつのるだらうと、同區七軒町三五株式仲買商白木榮吉氏に話をしたところ、夫れは結構なことだと先月初に千五百圓を投げ出して此の社殿が出來上つて、近く　伊勢皇太神宮、明治神宮、橿原神宮から御札を戴いて御祭り申上げることになつて居ると云ふことであります。誠に結構な事であります。

斯樣なる事は、家庭に於ける指導と相俟つて、其の效果を增大致しまして、天與の兒童の崇高なる心靈生活の發芽助成に寄與する所極めて大なるべきを信ずるものであります。

斯樣にして、胎敎から、母の膝に於ける情操敎育、卽ち幼少年時代の家庭的な、宗敎的な環境を經て、稍々長じては幼稚園、小學校に於ける朝拜感謝の習慣等を經驗體得せる幼少年者を俟つに非らざれば、眞の精神敎育の效果を擧げることは、極めて困難であると考ふるものであります。

第三に中等學校以上の學生々徒に對する方策としては

(イ)敎師をして、宗敎的理解と敎養とを持たしむることであります。之は勿論、第二の場合には必要でありますが、茲には更に深き敎養を要します。

以下は學校のことでありますから、寧ろ課外に於て行ふを適當と致します。

(ロ)生徒をして宗敎的講演を聽かしむることであります。或は時事問題を捉へて宗敎的批判を爲すことも結構と

思ひます。

(ハ)生徒の宗教的研鑽に對し、書籍等を選擇し、援助を與ふること。

(ニ)生徒をして、宗教的偉人に接觸の機會を與ふること。

(ホ)生徒をして、宗教的偉人の入信の動機を知らしめる、入信後の心境、生活態度、人生に對する識見等を知らしむること。

當神戸高等商船學校に於ては、日本固有の武道を通し、武德を發揚して、精神の修養を爲さしむる爲め、準正科でありまする柔道、劍道、及弓道の道場には、各國祖　天照皇太神宮、及武神であります　平安神宮を御祭り致して居ります。夫れから大正十三年の頃から始めたのでありますが、毎月一回課程外に於て教職員及有志の生徒を集めて顯本法華宗の御寺であります東京市品川の妙國寺の住職、中川日史師を聘して、佛教の講義を願つて居ります。中川上人は人格の立派なる方であり、學殖も深く、又話も上手でありますので此方を選びました次第であります。今までに講じ終りましたのは、最初に法華經、勝鬘經及維摩經でありました。之は昔推古天皇の御代に、攝政宮聖德太子は、佛教の大藏經典中法華經、勝鬘經及維摩經を鎭護國家の妙典として御撰定になりまして、勅命を奉じて御自身御講說遊ばされまして、其の佛教精神を以て、國民教化は勿論治世萬般の上に偉績を擧げられましたのであります。此の聖德太子の爲さつた所に習つて、法華、勝鬘、維摩の三經を先づ講義して貰ひました。夫れから日蓮上人の御遺文の內で、最も重要なるものでありまする立正安國論、報恩鈔、觀心本尊鈔、開目鈔及撰時鈔の五

大部、續いて日蓮上人傳と云ふ順序に講了して唯今は日蓮主義について講義をせられて居ります。尙數年前よりは正課に於ても、宗教的情操を涵養せしむる爲め、同師に御講話を願つて居りますが、私の退官致しました後も現校長は同樣繼續せられて居りますのみならず、近き將來更に印度哲學として其の時間を增加せらるゝやに聞いて居ります。

◇

私は今迄唯宗教情操を涵養することの必要を申上げましたが、我が國の如く既成宗教の雜然として對立して居る所に於ては前に申上げました如く、學校內に於て宗教を取扱ふことの困難なるは申す迄もないことでありますが、一體個人として如何なる宗教を選ぶべきかと云ふことは大切なる問題であります。成るべく日本の國體に能く副ふ所の最も優秀なる宗教を選んで、自個の信仰を確立することが誠に重要なる點であります。私自身の事を申上げて甚だ恐縮でありますが、私は佛教殊に顯本法華宗を選んで居ります。神道は勿論日本の國體に副ふて居る點は第一でありませうが、教として、其の內容は佛教の方が遙かに完備して居ると存じます。佛教は他の宗教に比して一番大きい完全したる教であります。佛教の內でも法華經を中心として一切經を觀る立場に在る法華宗を選びました。日蓮宗とか、法華宗の中にて非常に迷信を伴ふて居つたり、又お釋迦さんを忘れて日蓮上人の方に信仰の對象が移つて行つて居るものがある。之は日蓮上人の本意でないことは、上人の遺されたる御文章を見ても明かであります。日蓮上人は佛教の大義名分を正ださんとせられしと同時に、君臣の間の大義名分を正ださんとせられたのであ

ります。故に法としては佛身觀を說かれて居る法華經の壽量品を中心にせなければならぬ。卽ち本佛釋尊を中心にせなければならぬ。又國としては　天皇陛下を中心にせなければならぬ、卽ち國としては一王、法として一佛であつて、所謂一王一佛の思想を確立して日蓮上人の言はれたる、王法佛法に冥じ佛法王法に合する、法國冥合一如の理想に依つて中道を步むべく熱心に主張せられたのであります。夫れ故に承久の亂に、北條義時が三上皇を隱岐、佐渡、土佐の三ヶ所に御移し申したことについて、下刻上として痛烈に北條氏を責められたのであります。私は佛教ほど實に立派なる完備して居る教は外にないと存じます。あの蓮華は佛教の理想を表はして居るのであります。御承知の通り蓮華は穢い泥田の中に生ずるものでありますが、上に開いた蓮の花は誠に美しい清い何等の穢れをも有たない、清香掬すべき立派なるものであります。之が吾々人世に處すべき道を指し示して居るのであります。吾々は唯徒らに高遠の理想のみに走つて理論の靜ひなどして居ることは、決して眞に人生問題に對し、之を解決する道でない。さればと云つて、泥田の中にいつも潛り込んで居つたならば、人生又無意味なものである、卽ち此の理想と現實兩者の不離不卽の間に吾々の進むべき道がある。と斯樣に一方に偏し一方に囚はるゝことのない中道と云ふことを御說きになつて居るのであります。此の點は佛教の非常に尊い點であるので、斯る意味に於て釋尊の教は日常の私達の人生の生活を指導し、徒らに高い理想をのみ追ひもしなければ、又夫れを忘れて現實にのみ執着もしない、此の二つの間を卽かず離れずと云ふ形に於て進んで行くのであります。夫れで佛教は蓮華を最も貴ぶのであります。蓮華は泥田を離れない所に蓮華としての面目があると共に泥田の中にすつかり埋れて居つては、あの清ら

かな花の姿が眺められない。卽ち蓮華は此の泥田に卽かず離れずする所に、本當の蓮華の價値があるのであります。釋尊の教は吾々をして此の中道を步ましめようとするのであります。

宗教の本質を吟味して、信仰を確立する方面の事を御話しすれば、非常に時間を費しますので此の位にして置きますが。要するに日本の御國體に副ふべき、最も勝ぐれたる宗教を選んで、信仰を確立して、中道を步むべく精神の土臺を築かれたるものに對して、現在實行して居る樣な高等海員となるべきものに施す教育を行へば、教育其のものに魂が入つて參りますから、實に立派なる海員を養成し得ると信ずるのであります。

帆船練習船に於ける教育の如きは、大自然の爲めに鍛錬せらるべく出來て居るのであるから、教育するものも教育せらるゝものも、如上の意味に於て充實せる精神の持主であれば、一船の運轉士若くは船長として最も必要なる素質である

周到なる注意力　迅速なる判斷力
忍耐力　沈着
敏捷　勇氣
應急手段の豐富

（一つの方法にて成功せざるときは第二の方法により、若し之を誤るときは第三の方法と必要に應じ轉ずること）

が自然の内に養成せらるゝことゝ信ずるのであります。

私の御話し致すことは大體此れ丈けでありますが、尙此の機會に附け加へて、一寸申上げて置きたいことは、精神教育に於ては、只今申述べました通りの順序に進んで行きますならば、練習船の實習期間に於て、又機關工場の實習期間に於て、更に又社會の實際の出來事に打つゝかつて、充分の鍛錬を受けて、內に有する所謂本有の大精神力が發現せらるゝ如く、學術の教授に於ても、人間の內に有する全能力が發揮せらるゝ樣に、教授方法及教授內容について充分研究せられ、改善せらるゝ必要があると存じます。私の考へでは、學生々徒に對しまして、各學科の基礎的項目につきては充分に教授を施し、確實に智識を得せしめ、又十二分に頭腦を練らしめて、能力を豐富にして置いて、他日社會に出て必要に應じ更に研究を爲すに差支へなき樣にして置くと同時に、教へる分量を思切つて減ずる樣に致したいと思ひます。先生の研究した所を多量に生徒に授けると云ふ丈けでは、教育せらるゝ方は興味を感ずること少く、從つて能力を發揮するに至らぬものである。教授の最重要點は生徒をして研究心を出ださしむる樣に指導することである。單に雜駁なる智識を多量に注入することは能力を銷磨するに過ぎぬと存じます。要するに、人間の內に有する偉大なる能力が發揚せられてこそ、教育の價値あるものと信ずるのであります、之を以て私の講話を終ります。

神國日本の偉大なる力

（本稿は雜誌「海洋」紀元二千六百年記念號に登載せるものなり）

日蓮上人は「我が日本國は一閻浮提の內月氏漢土にも勝れ、八萬の國にも超えたる國ぞかし」と云はれ、此の立派なる國に生を享けたる幸福を思ふとき、實に感謝の念に滿たされ、餘りの嬉しさに涙が止め度なく出ると申されて居ります。私共も實に上人と同樣の感激を覺え、無限の皇恩、國恩に感謝致して居る次第であります。茲に皇紀二千六百年に際し、神國日本の光輝ある過去の歷史に思を馳せつゝ、所懷の一端を述べ更に報恩護國の信念に培ひたいと念願するものであります。

我が國は教育に關する勅語に「國を肇むること宏遠に德を樹つること深厚なり」と仰せられて居る如く、肇國宏遠にして歷代の天皇は慈仁の德を垂れさせ給ふて、國民は萬世一系の天皇を奉戴して至誠を盡して御仕へ申して來つて居るのであります、皇統一系連綿として茲に二千六百年續いて來たと云ふことは、單に年數が長いと云ふことを以て貴いのではなく、御血統と道統が並存して長く續いて居る所に非常なる尊さがあるのであります。日本は肇國のそも〳〵の初めより德を以て國を樹つ、卽ち道德立國であるから、御血統と道統とが並び存して來て居ることが注意を要する重要なる點であります。日蓮上人は「日本國の王となる御方は天照皇太神の御魂の入り替らせ玉へる王なり」と申されて居ります。私は日本の國體の力が種々なる方面に强い力を以て影響を與へて居ることを認む

るのであります。固より我が日本に於きましても、過去の永い年代の間には、御皇室の式微申上ぐるも洵に恐れ多い時代もあり、又臣下にして家門權勢の增長に伴ひ、遂に皇位を覬覦するが如き惡逆無道の徒輩の顯はれたることもあり、國家としても危き巖頭に立ちたることもないではないのでありますが、能く幾多の試練に堪へ常に難局を打開して、世界の一等國として今日の隆運を見るに至れることは、下忠誠なる臣民の一身一家を顧みずして邦家の爲に盡せる努力もさることながら、上歷代天皇の御稜威と、天祐神助の加護に依るものと深く信ずるのであります。

今國史を繙いて、儒敎及佛敎の我國に傳來せる當時を追懷しますれば、儒敎は應神天皇の時代に初めて我國に傳へられ、朝廷が此の新しき思想並に之に伴へる新しき文明の攝取に努力せられたる結果として、日本の國民道德を向上させたのみならず當時に於ける文化の進步せる支那人及朝鮮人の渡來に依りて、工藝、技術並に養蠶、機織等の進步著しく我國文化に貢獻すること極めて多大でありました。特に德川時代に於ては、儒敎が國民の道德的並に政治的生活に於ける重要なる指導原理となり、諸侯は之に則りて其の國を治め、士人は之に依りて其の身を修めたのであります。斯くの如く儒敎は、我國の文化に盡せる功績多大なりと雖ども、唯だ一點主權者に關する觀念に於て、日本固有の思想と相容れざるものがあります。卽ち儒敎に於ては德ある者が、君主となるとして居るのであつて、當時の我國に取りては甚だ危險なるものでありました。今具體的事實を詳細に述ぶるの餘裕はありませんが、蘇我氏の惡逆の如きは其の一つであつて實に儒敎の感化と歸化支那人の煽動とが權勢並ぶものなき蘇我氏をして事

茲に至らしめたものであります。

佛敎の傳來は、欽明天皇の時代に百濟王が之を吾が朝廷に勸め奉まつれるに初まり、當時朝廷が先づ佛敎に歸依せられたるため、日に日に隆盛に赴いたのであります。さりながら崇佛派の蘇我氏と、排佛派の物部氏との間に佛敎の取捨につきて激しき確執を生じ、遂に政治問題にまで發展した。然るに聖德太子は英邁、達識の御性格を以て適切なる御裁斷を下され、其の取るべき主義を確立せられました。卽ち太子は神道を以て政治の根本主義となし、儒敎を以て國民の道德的生活を調整豐富にし、佛敎によつて宗敎的生活を淨化せんとしたのでありまして、眞に我が國固有の根元を失ふことなくして新文明の精髓を取り入れ適當に按配せられたるものと云ふべきであります。

太子は直接隋唐と交通を開かれまして、其の後奈良朝の末に至るまで、遣唐使の派遣前後十一回、その度每に必ず留學生を隨行せしめまして、彼地に留まりて宗敎、文學、藝術、政治、及法律の研究に從はしめられました。蓋し此等の使節及留學生の將來せる文明が、物心兩方面に於て我が國の文化に貢獻せることは、多大なるものであつたのであります。

太子は鎭護國家の妙典として、佛敎の大藏經中法華、勝鬘、維摩の三經を御撰定、推古天皇の勅命を奉じて御自身御講說あらせられ、以て國民敎化は勿論治世萬般の上に偉績を擧げられ、所謂推古文明を創造せられたる識見は何人も敬仰措く能はざる所であります。當時支那は我國を以て劣等なる一弱國と見做し居りたるにも拘はらず、聖德太子は使節を支那に派遣するに當りましては、强大を矜りし隋の煬帝に向つて「日出づる國の天子書を日沒する

國の天子に致す、恙なきや」との國書を與へ對等の禮を以て彼と交り、聊かも國家の威嚴を損せられなかつたのであります。

斯の如く支那と接觸して其の文明を攝取すると共に、國民的自覺もまた强大となりましたが故に、日本建國の由來並に精神及びこれに伴ふ國體の尊嚴を內外に明示する爲太子は國史の編修を企てられ、又十七條憲法を制定せられまして、尊皇の大義を明確に御指示あらせられ、當時の社會並に政治組織を根柢より革新せらるゝ御意圖を示させられ後年中大兄皇子及び中臣鎌足の雄略英斷に依つて、大化改新を成就せられたるは、實に聖德太子の此の準備工作が預かつて力あるものと拜察せられます。

茲に吾々は我が日本の國體は實に偉大なる力を有して居ることを知らねばなりません。身を修め人を治むる學問として、道德と政治とを兼ね敎ゆる儒敎が其の發祥の地たる支那に於て實際に普ねく行はれて居らず、却つて我が國に於て全分の光を發揮して居ります。又印度文明の精華ともいふべき佛敎に就ても、同樣でありまして、佛敎は遂に印度を救ひ得ざりしのみならず、印度も佛敎を生かし得なかつたのであります。又支那に於ても漢譯藏經と堂塔伽藍の殘骸を留むるに過ぎずして、何等國民の信仰に力を與へ得なかつたが、獨り我が日本に於てのみ、大乘的全分の光を放つて居るのでありますが、之れ實に不可思議とも云ふべき程偉大なる國體の力に歸納すべきものと信ずるのであります。

國難として第一に數へらるべき蒙古の來襲を回顧すれば、初め成吉思汗が支那の北部に起り南滿北支を平らげ、

中央亞細亞を征服して西進を續け、高加索山脈を越えて歐洲に入り、南方露西亞及び西部亞細亞を平定し、其の子太宗父の歿後其の志を繼いで先づ金を滅し、高麗を從へ、第二回の歐洲遠征軍を起し、歐洲全土の過半を打ち從へ其の子定宗及び憲宗を經て忽必烈に至り、文永五年正月國書を我が國に送り通好を迫つたのであります。然しながら鎌倉幕府の執權北條時宗は蒙古の國書の禮を缺くこと甚しきにより、返書を與へずして使者を逐ひ歸し、其の後數回使節の來朝があつたが、時宗は斷乎之を斥けて相手にしなかつたのであります。是に於て文永十一年蒙古は戰船九百艘を率ひて壹岐、對馬及び筑前等に入寇し壹岐、對馬、兩國の守護代は戰死し、沿海各地に掠奪を縱にして歸國しました。然るに翌年再び使者を遣はして通好を求めて來ましたので鎌倉幕府は杜世忠以下元使五人を龍口に斬り、直ちに全國の大小名に命じて蒙古の來襲に對して必死の覺悟を定め萬全の備へを成さしめ、新に九州探題を置いて一族の有力者を之に任じ、單に彼の來襲を防ぐに止まらず、更に進んで彼を攻めんとの計畫を策したと云ふのであります。其の意氣洵に壯烈なりと言ふべきであります。然るに弘安四年の夏に至り、蒙古は遂に大軍を率ひて來寇しましたが、颶風に遭ふて遂に殆んど全滅に終りました。其後遂に日本征服を斷念したのであります。龜山上皇が躬を以て國難に代らんことを　伊勢の大神宮に祈り給へるも此の時であります。

宏覺禪師が

末の世の末の世までも我國は
よろづの國に勝れたる國

と詠んで、蒙古降伏を祈願したのも此時であります。當時相模太郎の勇斷の下に十四萬の大軍をものともせず、國民上下擧つて一體となり必死撃滅の覺悟を定めて防戰に從へる處に、伊勢の神風の感應ありしも故ある哉と思惟するのであります。

次に幕末に於ける日本の國難とも稱すべき我が國の國際情勢を顧れば、英、佛、米等の諸國の艦船は屢々長崎、下田、那覇等の諸港、及び八重山、宮古等の諸島に來り、和親通商を結ばんことを强要し、露國は頻りに吾が北方の邊境を脅威し、遂に樺太及び千島に對する侵略は極めて露骨となり、樺太に於ては邦人の漁場を襲ひ、其財產を奪ひ、火を番所に放つて去るの暴擧を敢てし、擇捉を襲ふて我が防禦設備を砲火の下に破碎する等、狼藉至らざるなしと云ふ有樣でありました。遂に嘉永五年米艦四隻ペリー提督の指揮下に浦賀灣內に來泊、次で安政三年七月同じく下田港に來着、武威を示して開國を强要しました。當時國內の狀態は、幕府並に諸藩の失政甚しく、財政は窮乏し、武備弛緩して、幕府の權威漸く地に墜つると同時に、勤王の精神は各地に勃興し、國家の前途を憂ふるの志士は或は尊王攘夷を唱へ、或は尊王倒幕を主張し、一方には公武合體を以て之に對抗せんとするもあり、實に喧々囂々たる有樣であつたのであります。

幕府當局の間には、最も徹底せる開國論者として岩瀨肥後守の如きものあり、此の時機に於て幕府從來の固陋因循なる鎖國政策を打破して、一大革新の政治を行はざるべからざることを主張し、一方米國使節ハリスは武力を以てしても自國の意志を達成せんとし、期限を定めて其の回答を迫つて來ました。遂に閣議に於ては勅許を得て條約

に調印することに一決したるに拘はらず、何んとしても其の實行に到達し得ず、大老井伊掃部頭直弼も、初めは大いに躊躇し居りたるも、終に岩瀨等の主張に動かされて勅許を得るに至らずして和親貿易條約調印を斷行することゝなりました。これ卽ち江戸條約と稱せられ安政六年より明治三十一年に至るまで實施せられたるものであつて、其の後英、佛、露、蘭の諸國との條約は皆是を標準として締結せられたのであります。

萬延元年三月三日大老井伊直弼が白晝少數の水戸浪士によつて櫻田門外に要擊せられ、遂に其の刄に斃れしより、倒幕の勢は燎原の火の如く全國に彌漫し、明治維新の必然の道程を辿つたのであります。今にして當時を回顧すれば、我が日本は實に累卵の危に迫つて居つたのでありますが、恰も英、米、佛、露、何れも佛國第三革命に依る全歐洲の動亂の爲、若くは自國政變の事情が野心を我が國に逞しうするの餘裕なからしめたものであり、之れ眞に天佑と云ふの外はないと信ずるのであります。

慶應三年德川慶喜の大政奉還によりて、維新の黎明は茲に現出したのでありますが、倒幕によりて維新の目的が達せられたるにあらずして、僅かに此時を以て其の第一歩を踏み出したるに過ぎなかつたと見るべきでありませう。明治元年三月　明治天皇が國是を御定めになられました。其の國是とは有名なる五ヶ條の御誓文で次の通りであります。

一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ

一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ

一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサラシメンコトヲ要ス

一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ

一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

明治天皇は天地神明に誓はせられて、確乎不拔の御決心を以て其の御實行を期せられたのであります。明治維新は此大方針に從つて萬難を排して、着々革新の歩を進められまして、爾來諸侯の版籍奉還、廢藩置縣、國民皆兵制度の確立、帶刀の禁止、學制及び憲法の發布等を行はせ給ひ、明治二十三年國會開設あらせらるゝに至るまで、幾多の狂瀾怒濤を突破あらせられ、明治維新完成の彼岸に到達せられたるものと云ふべく、斯る御大業の完成には一方に於て幾多の熱血忠誠の志士が皇室を中心として君民一體の國家を形成せんとして身命を賭して國事に盡せる功多きに居るは勿論でありますが、私は　孝明天皇及び　明治天皇の御威德と皇祖皇宗神靈の御加護による神業と信ずるのであります。

茲に日本は全く封建の餘殃を脱却して、世界の舞臺に現出し、制度文物の範を總て歐米に採り、急進の歩調を辿り日清・日露の兩戰役に於て大捷を博し、國難を經る毎に益々國力を增進して遂に一躍世界の强國に伍するに至りました。然しながら或時は歐米の絢爛たる物質文化に眩惑せられ、極端に歐米化したる結果日本固有の精神文化を失墜せるにあらずやとまで、識者の間に憂慮せられたる程の事もありましたが、爾來國運益々隆昌に赴き、遂に昭和六年秋滿洲事變勃發するに及んで、張學良政權を驅逐して滿洲國の獨立を援助し、翌七年二月の獨立を見るに至

りました。而して同年九月十五日我が國は此の新興の滿洲國を承認し、茲に兩國共存共榮の基礎を確立したのであります。斯くて國際間の接觸漸次激しくなるに從ひ、國民の魂の内に潜在せる愛國心愈々熾烈となり。國民的自覺を呼び起し、自主的精神の横溢を見るに至り、滿洲事變に對する列强の壓迫を斥け敢然として國際聯盟を脱退し更に倫敦條約をも廢棄するに至つたのであります。

多年排日抗日を續け來りたる支那は滿洲建國を以て日本の帝國主義的野心に出でたるものと誤解し、失地回復を叫んで國民の敵愾心益々增長し、之がために日支兩國間に不祥事件續發するの狀況でありましたが、遂に昭和十二年七月七日北京郊外蘆溝橋に於て、我が軍夜間演習中宋哲元部下の支那兵に射擊せらるゝに及んで、之に應戰するに至つたのであります。然しながら、我が國はよく隱忍自重して事件を局地的に解決せんと努力しましたが、支那は自國の國力を過信し飽くまで挑戰的態度を取つたので、我が國は止むなく不擴大方針を放棄し、武力に訴へて徹底的に膺懲して支那國民の反省を促すことに決し建國以來未曾有の大軍を支那大陸に送るに至りましたが、爾來皇軍將兵は海陸協同して　陛下の御稜威の下、勇戰奮鬪を續け、聖戰二ヶ年半の間に敵首都南京を始め、北、中、南支全地域に亘り、其の主要都市、要衝及島嶼を攻略し、皇軍の威武を支那四百餘州に輝かし、世界各國の耳目を衝動せしむるの狀態に在ります。今は敵首領蔣介石は四川の奥地重慶に據りて尙餘喘を保ち、長期抗戰を叫びつゝあるも、其の裏面に在つて有力なる後援を與へつゝありし英、佛、及蘇聯の如き援蔣國家群は、昨年九月勃發せる歐洲大戰の爲に、支那に見切をつけて東洋より手を引かんと爲しつゝあります。我が國は茲に歐洲戰爭不介入の方針

を堅持して、專ら支那事變處理、東亞新秩序の建設に向つて驀進しつゝあるのであります。

惟ふに我が國は建國以來悠久二千六百年　神武天皇御東征の當初より、幾度か險難を踏破し危地を脱して、一難を經る毎に益々國力を增進し、今日の隆運を招來して、皇威八紘に輝く皇國の眞姿を拜するを得る吾人國民の幸福を思ふにつけ、將來に向つて更に一層各自の立場に於て靈忠護國の信念を固めねばならぬと信ずるのであります。

以上此の紀念すべきよき年を迎ふるにあたり、標題に就て聊か所感を述べたのでありますが、擱筆するに際し私の生死を超脱したる國民的信念を一首の和歌に托して左記致す次第であります。

わが魂はほとけの慈悲にいだかれて
永久に生きつゝみくにまもらむ

昭和十五年六月十五日　印刷
昭和十五年六月二十日　發行
【非賣品】

編輯兼發行人　大阪府南河內郡藤井寺町字岡　小關三平

印刷人　神戸市神戸區江戸町百貳番　田中印刷出版株式會社　代表者　田中守一

403
282

落